

成入字級

播磨の聖人「亀山雲平先生」を発掘する シリーズ10回

第7回目

テーマ：碑文集を求めて

亀山雲平顕彰会代表

講師：長野哲先生

日時：2月16日（土）PM 1:30~3:00

場所：白浜公民館1F会議室



今回は

「神道碑」（姫路城、最後の城主酒井忠邦公の廟前にかっての日本
聖たちが建立、碑銘文・好古堂教授亀山雲平）の解説をはじめ、播磨
地域はもちろんのこと、ひろく県外にも存在する雲平先生の碑文につ
いて紹介。

碑銘文には「国際忘家」を座右の銘とされた雲平先生の学者・教育者
としての格調高い人格・識見・思想が偲ばれます。

お友だちを誘いあって、多数、聴講ください。

[5]

白浜公民館だより [特集号]

姫路市立白浜
828甲35
646-44

碑（いしぶみ）

人に墓碑があるようには町には記念碑がある。
これは人間・自然の心情であり愛情の表現でもある。
そこには入それぞれに生きぬいた真実と
うつりゆく世の変転の跡が秘められていく。
そう思うと、ものいわぬ一つの碑にも
無限の愛着といとおしみが湧いてくる。

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑
2	碑
3	碑
4	碑
5	碑
6	碑
7	碑
8	碑
9	碑
10	碑
11	碑
12	碑
13	碑
14	碑
15	碑
16	碑
17	碑
18	碑
19	碑

1	碑

<

亀山雲平碑文集について

この碑文は、亀山雲平が生前に多くの偉人たちの遺勲をたたえ、沐浴斎戒して、鎮魂のまことをささげ、その功績を不朽に伝えんと奉詞した名句である。

そして、雲平自身も没後、かつての江戸、昌平校の学友、南摩綱紀が墓銘名を、三嶋中洲、殷野藍田が顕彰碑銘を書いている。

墓は景福寺、顯彰碑は松原八幡神社に在る。



董守庵先生
（般若寺・龜山靈平和尚墓所を訪ねて） 明成13年6月2日撮



節字龜山先生墓碑銘

國家日赴開明。人情月流輕偷。而謹惡君子若吾節字翁。世未多見其比也。翁諱美和。字由之。稱敬佐。又源五右衛門。後改雲平。節字其號。龜山氏。姪路藩世臣。父諱百之。實福田繁彝第二子。來嗣龜山成將後。妻其女。翁其第二子。十歲喪父。與兄剛毅事母孝養極至。十八歲擢藩學授讀。剛毅歿。翁承後。嘉永四年以藩命學江戶昌平費。爲詩文係。尋藩主緝光公逝。翁在費。日穿禮服。危坐終喪。居三年。歸爲顯德公侍讀。公勵精圖治。政績較著。翁啓沃之功居多焉。及閑亭公襲封。擢大監察兼教授。翁清廉率先。一藩風俗漸改。增俸至百七十石。當此時。國家多難。公陞大老職。翁在藩輔政。使無內顧之憂。其功多矣。既而公致仕樂堂公承後。明治元年正月伏見之役起。王師逼國疆。翁與藩士歸順。遂得主家存祀者。亦與有力焉。裕齋公立。翁爲侍讀。遷中小姓組頭。無幾病辭職。後爲松原八幡社祠官。榜下帷教授。名家塾。日觀海講堂。遠近來學者甚衆。二年補少教正。尋兼神職取締等諸職。翁爲人眉目俊秀。外恭謙而內儼正。歷任諸職。鞠躬盡瘁。公爾忘私。對家人如賓客。遇門人如朋友。奉身節儉。賑恤貧窮。居松原凡二十年。景慕其德。來訪者日夕接踵。翁每吐哺迎之人。稱爲播磨聖人云。三十二年五月六日病歿。距文政五年閏正月二十日生七十八年。鄉人哀悼如喪考妣。用鄉葬之禮。室姬路景福山先塋之次。有詩文稿若干卷。其他雜著甚多。皆藏家。翁始娶荒木氏。生二男一女。皆先歿。繼室西松氏。無子。亦先歿。長男亨有。遺女。乃養內山仲次男茂理配之。以嗣家。翁之歿也。舊藩主酒井伯悼之。賜赙金若干圓。蓋異數也。銘曰。

勉學養德。奉職忘身。接人謙讓。脩己恪勤。厥行儼正。厥言和溫。弟子是式。風俗歸醇。君子人乎。君子人也。

明治三十六年五月

正五位勳五等南摩綱紀撰并書時年八十有一

養孫 龜山茂理建之

節宇龜山先生墓碑銘

國家日に開明に生き、人情月に慈愛に死る。而して運命の君子吾か節宇翁の若きは世未だ多く其の比を見ざるなり。翁、諱は美和、字は由之、敬佐又は源五在衛門と称し、後雲平に改む。節宇は其の号なり。

龜山氏は姫路藩の世臣なり。父諱は百之、実は福田繁舞の第二子なり。來りて龜山成将の後を嗣ぎ其の女を妻とす。翁は其の第二子なり。十歳にして父を喪ひ兄の剛毅と母に事へて孝養極めて至る。十八歳にして藩学の授曉に擢んでらる。剛毅歿し翁後を承く。嘉永四年藩命を以て江戸平賀に学ひ詩文係為り。尋きて藩主鎮光公近く、翁罷に在りて日に礼服を穿き危坐して喪を終ふ。居ること三年、帰りて頴徳公の侍講為り。公勵精して行を因り政績較著なり。翁啓沃の功居多し。関亭公封を翼くに及び、大監察兼教授に擢んでらる。綏清廉率先、一藩の風俗漸く改まる。俸を増して百七十石に至る。此の時に当たり國家多難、公大老職に陞る。翁藩に在りて政を輔け、内顧の憂ひを無から使め、其の功多し。既にして公致仕し梁堂公後を承く。明治元年正月伏見の役起こり、王師国境に逼る。翁藩士と與に帰順し、遂に主家の祀を存するを得るに亦與りて力有り。裕齋公立つ。翁侍読と為り中小姓組頭に遷る。幾はくも無くして病み、職を辞す。後に松原八幡社祠官と為り、傍ら帷を下して教授す。家塾に名づけて觀海講堂と曰ふ。遠近來たり訪ぬる者、日に夕に踵を接す。翁、毎に補を吐き之を迎ふ。人称れ、尋いで神職取締り等諸職を兼ぬ。

翁、人と為り眉目俊秀、外謙讓にして内厳正なり。諸職を歷任して鞠躬尽瘁、公のみにて私を忘る。家人に対しては賓客の如く、門人を遇するに朋友の如し。身に奉するに節儉にして貧窮を賑恤す。松原に居ること凡そ二十年、其の徳を敬慕し来たり訪ぬる者、日に夕に踵を接す。翁、毎に補を吐き之を迎ふ。人称して播磨聖人と為すと云ふ。

三十二年五月六日病歿。文政五年閏正月二十日生れしより距つること七十八年。鄉人哀悼すること考妣を喪ひしが如く、鄉葬の礼を用ひ姫路景福寺の先塋の次に立る。詩文稿若干巻有り。其の他雜著甚多く皆家に蔵せり。

翁始め荒木氏を娶り、第一女を生むも皆先に歿す。長男亨に遺女有り、乃ち内山仲次の男茂理を養ひ、之に配して以て家を嗣ぐ。翁の歿するや、旧藩主酒井伯之を悼み聘金若干円を賜ふ。蓋し異數なり。銘して曰く

学に勉め德を養ひ、職を奉じて身を忘る。人に接して謙讓、己を脩むるに恪勤、

その行ひや儀正、其の言や和温、弟子是れ式り、風俗醇に帰す。君子人か君子人なり。

明治三十六年五月

正五位勲五等南摩綱紀撰并びに書 時に年八十有一

養孫 龜山茂理 之を建つ

訓注

軽儻に流る 軽はすみで意けやすく或り勝ら。

謹懇 深くすなお。

危坐 正座。形を改めて座すこと。

啓沃 己が所信を主君に述べてその考えに影響を及ぼすこと。

較著 顯著と同じ。目立つて良くなること。

致仕 職を辞すること。辞任。

王師 国境に迫る。朝廷方の軍が国境に押し寄せる。

唯を下して教授す 師となつて子弟を教えた。

鞠躬尽瘁 全力を尽くすこと。

身に奉するに至り 自分は質素儉約して、困窮した人々に施した。

踵を接す 後から後から次々と続く。

毎に哺を吐き去る 中國、周の時代の宰相たつた周公旦という人が、髪を洗つている最中に訪ねて来た人があれば、いったん髪を洗うのを止めてその人に出会い、食事中に訪ねて来る人が有れば、その度ごとに食事を中止して迎え、そうまでして、政治を輔佐してくれる賢人の訪れを待つたといふ故事（※一浴に三たび髪を握り、一飯に三たび哺を吐く）から。

哺 食物 考妣 亡父亡母。

異数 異例 式 のつとも

君子人か君子人なり。

君子人（學徳ともに優れた立派な人）と言うべき人でしょうか。
まさにその通り、この人こそ眞の君子人と言うべき人である。

世臣 諧代の家臣。

賓客 大切なえらいお客様。

舊伊勢崎藩主故正四位子爵酒井公神道碑

公姓酒井諱忠彰幼名知三志摩子諱忠恒公之八
男也以嘉永五年十月十三日生務長掌漢籍刑法
馬術等於其藩校當是時公兄下野守諱忠強公既
代忠恒公而立明治元年六月公為忠強公養子嗣
其改諱忠彰十一月叙從五位佐下野守尋為東京
市芝區取締取締言警衛其地也二年三月版籍奉
還六月佐伊勢崎藩知事七月以朝旨入朝賜
天孟勅曰當歸藩勵精盡其職矣乃歸藩四年二月
移籍於東京七月免藩知事於是每日赴大盛學校
修英學十月佐少議生季舞之爾後獻祿士役資金若干
者三四並賞賜木盆一個又鹿兒島征討之後寄
贈清酒絲織絲等東京市虎列刺恤之行寄贈豫防
備若干並賞賜木盆一個而皇城之罹災也獻金
二百圓賞賜銀盆一個伊勢崎町電信分局之設置
也寄贈自即地七拾八坪賞賜木盆一組邦俗重盆
發個曰一組入有本所議事堂之建蓋則寄贈其
費金有米價膳費之憲則為貧民施與之舉並賞賜
木盆一個而至廣島第七回臨時帝國議會則駁斥
勵精在盡耳職務當賜銀盆一組時二十九年三月
也先是十一年十二月撰舉于東京府會議員十七
年七月授子爵二十年十二月叙正五位二十五年
七月撰舉于貴族院議員二十五年七月叙從四位
二十七年三月授大婚二十五年祝典章而及三十
九年七月叙四位是月三十日以病捐館舍春秋四
十五文何奄斯公之速也葬于東京市淨草溫斎
谷明幸龍寺謹誌曰彰德陵殿穆山南瑛大居士夫
人三宅氏第下加一男二女男名忠一君為世子嗣
財若夫獻核負勞軍、救復民即建塋不一而足終
至後子爵佐貴族院議員正四位公之仕途不無
陞且盛乎水公之學術德行超羣衆諸產物何以至
此休惟公家與吾舊主家有平丈相依之親何得不
謹而記且銘焉乃銘曰

上毛之土 捷封二萬 不拔舊價 能奉國憲
官爵並進 其功所宜 敬之直解 列侯良師

舊姬藩主故從四位下男爵酒井伊守公
神道碑

吾酒井氏之於幕府也大昌公嘗自老中上席為大
老職後十餘代入襲其職者獨有伊亭公而已公諱
忠續初諱忠順通稱仁之助後改勘解由致仕歸開
亭丈旅酒井安房守譜忠誨君之長子也萬延元年
十二月宗家顯德公晦薨有世子曰稻若君猶四歲
當是時國家漸多事諸老臣議以為藩屏之任必待
長君於是定策請幕府迎公入嗣宗家待稻若君長
以為公世子是月幕府許其請賜公以先公遺領十
立萬石以為謠詰格文久元年三月為謠詰叙從五
位下佐雅樂頭琴敘從四位下佐侍從二年五月賜
暇歸藩命繫留京師任其警戒事六月至京八月充
是松平伯耆守為所司代未至使公且帶所司代職
務以待其至九月以特旨入朝賜天盞是月伯耆守
轉職牧野備前守為所司代至京乃文附其職務十二
月入朝 天皇親王往皆有賜奉發京歸藩十三
月將軍昭德公將以明年二月入朝使公留守江戶
三年正月至江戶六月為老中上席七月京師長州
藩士之變起奉幕命至京候宸襟九月入朝拜
龍顏賜天盞是月復命幕府十一月兼督會計及海
陸軍務事十二月危將軍至京元治元年正月履將

軍入朝拜 龍顏且汗觀 辰輪三月扈將軍入朝
并觀舞樂又賜酒饌五月扈將軍入朝賜吉次所鍛
劍一口是月扈將軍歸江戶二月免老中上席溜詰
如故未幾長防征討事起將軍將進發命公留守江
戶為政務諮詢日夕登城九月以在職中扈將軍入
朝及擔佐事務勉勵賞賜延壽國吉所鍛大刀及信
國所鍛小刀各一口慶應元年正月佐左近衛少將
二月為大老衛四月長防再征事起將軍進發至大
坂城命公留守江戶委任幕職十一月免大老職溜
詰如故二月八月將軍薨于大坂城十二月賜其遺
物濃州兼常所鍛小刀一口三年二月先是稻若君
早世因養親族三宅土佐守康直君二男君若君為
世子亦早世終養親族幸立郎君為世子至是該家
而老號潤亭幸立郎君即忠惇公也既而 王政維
新忠惇公亦養支族酒井下野守忠強君第莊藏君
為世子讓家而老庄藏君即忠邦公也明治三年二
月支族酒井錄四郎君請官迎二老公而同居其邸
九年四月本鄉興錄四郎君議又請官迎二老公而
復舊十五年十一月奉師又稟二老公請官終分產
別室二十二年五月大老公授男萬永世列奉族二
十八年十一月三十日以病謚焉捐館舍春秋

舊諸臣聞訃莫不皆敬悼惋惜服心喪者焉寔于
府北谷中望域玄性嚴毅如不可犯者然其接臣下
必以禮且能假顏色故臣下亦得盡其言公已致仕
優游樂飴年非有過人之量何以至此銘曰

幕運式微 大廈難支 東西駿奔 一身扶持
大難未起 知幾其神 急流勇退 明哲保身

今般有志諸士之厚意ヲ
以故忠績墓前一建碑及
石燈籠ヲ設備被致一層
莊嚴添一拙者共ニ於テモ
滿足、至り不快候方謝意ヲ
表スル為、如此候也

明治三十二年四月

酒井忠弘

酒井忠惇

多喜山書

東京市牛込尾市方力加野前
留霧酒中也
江口

故從四位公廟前獻備品處辨頤末報告

毛
東
父

故徳四翁公廟前獻備品處備類末報告

概 言

向々ニ吾輩相謀リ舊恩万一二報スルノ微衷ノ表スル爲ノ 故從四翁公廟前ヘ
石燈籠クハ碑碣ヲ臥備セントア裏告セニ陸續トシテ同志諸君ノ加入ト得其
備金ノ多々吾輩隨算ノ外ニ超出セシテ以更ニ前議ヲ擴充シテ同志諸君ノ加入
説ト双株ノ石燈ヲ併セ獻シ焉年祭日ニ至リ獻備人ノ連名書テ祭帛料ニ付シ之
ヲ廟前ニ捧ケ所千秋祭文ヲ朗讀シ以テ獻備ノ意ヲ神靈ニ奉告セリ此日 文
子公ヨリ親シニ此舉ヲ滿足セラレシ特命ヲ辱フセミ夫レ此獻備ヲムニ固ヨリ
永遠不朽ノ職ニ一時ノ觀美ト爲スニ非ナレハ吾輩拮据周旋其成功ノ速ナラン
リテ望ナルニ非スト雖ヒ文辭ノ調查石質ノ揀擇及形制等ニ多アノ時日ヲ要
ヘンノ以テ乃チ石燈、三月廿四日神道碑、十月十一日ヲ以テ遂ニ建立ノ功業
ミムニ至レリ於此乎吾輩負擔ノ事項ハ全ク終了スト謂ソヘシ抑吾輩此舉ノ
如建盤大ニ至ランコモ豫想セヤシニ諸君ノ同心協力ノ以テ遂ニ此好果ヲ結
ヒ其素志ヲ達スルニ至リシハ實ニ吾輩ノ欣喜ニ堪ヘサル所而シテ諸君エ亦感
ニ此報道ヲ得テ滿足キルヘオハ深ク信シテ疑ハヤル所ナリ依テ其獻備品ノ
景狀碑文祭文各人ノ名氏金額及ヒ出納精算ヲ左ニ詳記シ併サア其額末ヲ爰ニ
榮銘シ謹テ以テ諸君ニ告ク諸君幸ニ一過ノ覽覽ヲ至ヘ

明治十三年十月

東京駿河臺東紅梅町四番地	高須退齋
同 西小川町二丁目一番地	熊谷薰郎
同 神田錦町一丁目二番地	關長聘
同 湯島天神町一丁目百七番地	田所千秋
同 神田山本町二十七番地	岩橋靜齋
同 青山北町三丁目六十三番地	杉山裁吉

○舊姫路藩主故從四位酒井公神道碑銘

明治十二年三月二十五日吾 舊姫路藩主從四位裕齊酒井公捐館舍矣夫吾儕之於舊藩生於碌長於學患義累世不啻海岳今我寒而衣縷而食者不可不思其所由雖氣運有遷公義有在然及 公之世名絕君臣之分藉分離東西追慕之忱於 公最有不容已者矣於是衆相謀建碑於 公墓前並獻以石燈二座乃謹記 公之梗概吾

公諱忠邦幼字玆藏支族 舊伊勢崎藩主酒井忠恒君第九子以安政甲寅正月十五日生明治紀元二月移於宗家更稱直之助年甫十五時吾藩坐幕府事蒙 刑讒

公將伏 謾謝之至大津不得入遂自待罪于藩五月有 命頒宗祀而茅土十五萬石如故二年正月叙從五位下任姫路頭尋敍從四位下六月上表納封土是月任姫路

藩知事賜舊封十分一爲家祿四年二月移籍東京遂家焉七月廢藩置縣因免本官先是公大有志於學公務之暇常延學士而講習焉至是慨然欲遊于海外遂請于

官得允以十二月航海於米國居三年而歸整理家政紹繹前業未幾罹肺病終不起享年二十有六卒于府北谷中塋城 公納 西尾忠篤君妾女爲夫人質 故顯德公女

生一女於是又有身宗族定議以 顯德公姬室 顯壽太夫人續宗祀既而 夫人分
娩舉男名 忠興蓋行將爲嗣也初 公之入續宗祀也時情艱阻藩事亦多端必有人
所不能忍者至以貨顯之身跋涉萬里又必有人所不能耐者然而 公已能忍於內而
家道興焉又能耐於外而學術修焉天若假之以年則 公之德業必不止于此也今則
已矣嗚呼痛哉米遊顛宋別有從臣高須篆碑文在焉不復贅也銘曰

有鑑其龐 維城之隈 爰卜佳域 噫 公暨乎 世路崎嶇
其德乃進 海濱澎湃 其氣愈振 具瞻所屬 玉山岱頤
涼風行質 赫兮聲名 諸臣舊誼 蘋蘩奉祀 名勒碑背
公其監此

○御墓前祝詞

從四位乃殿乃君乃廷乃奥都伎乃御前爾各母參來集比畏美畏美哥白久志年
乃此月乃今日乃日波也瓢形乃天路遙祁渡良雁乃音乃美暗都棹弓谷中爾立留春謹最
追志久款加比早一歲乃廻良來經天其月日閉可母抑吾徒諸年波幾百年止
數母留不知代波次々止重年次々我君止伊仕爾都蒙里大伎御落計々多久乃御惠
毛可乃見山筑波山乃蔭與里繁久棟間湧譽乃濱乃海底興里深久那在氣如此有問
爾時世乃邊里行禮婆可母大政古爾復良國々乃御制度毛一筋仁新麻來志御舍乃隨之
國乃君波此御府下爾良給比己資自志諸波猶本都國止殘里居天東爾西爾曾伎
居奴然波雖有其御德澤波惠美榮流春花如尊久其御親波朝霞立母隔天奈里別
且此殿乃君伊麻咤字真若伎御年乃間爾家乃名受繼給比都明治乃元年與始互出
座婆朝廷邊乃御警衛爾忠爾入座天波簷屏乃任爾懸切爾世乃爲國乃御爲止内外乃
事爾勞勤給比事波御々代々乃君等爾劣里給婆邪故其御勲功手實稱爾其御行蹟
乎仰可傳天高須遐藏熊谷翁郎杉山裁吉岩櫛辭彥誠長膺田所千秋等猶同心乃人
々止誰古知天是乃御前爾多令閉乃碑築建石乃火所照志述確及今日乃御祭典
乃幣帛代祭奉手久平介安介御心母種第宇豆乃比給止此乃御前爾參集閉人々等
諸群雀宇受須麻里居天畏美畏美拜美奉良久申須

○ 出金人姓名及金額

高須家毛	金三拾圓之部	小笠原尙弼	天野眞倫	熊谷薰	山田安榮	開長	曆田所千秋	岩橋靜彦	杉山裁吉	高須碌郎	石本網
高須退藏	武井守正	金拾貳圓之部		金五圓之部	佐久間秀修	興平	重固	岩橋靜彦	杉山裁吉	渡邊賤郎	
砂川雄健	佐藤幡鶴	金壹圓五拾錢之部		金四圓八拾錢之部	保科保操	松上孟一	金三圓五拾錢之部	高橋宗翰	宮地長夫		
宇野要星	野廣堺	金壹圓五拾錢之部		金三圓之部	竹田欽德	石見厚一郎	松木美凱	高橋宣五郎	渡邊賤郎		
矢島節夫	大河内廣治	金貳圓五拾錢之部		金貳圓五拾錢之部	高橋宗翰	岡部勘六	大平清容	齊藤貫五郎	木村美豊		
伊藤正信	近藤至	金貳圓五拾錢之部		金貳圓五拾錢之部	柴田左司馬	境野大吉	武井正平	武井秀實	太田清藏		
石川公一	酒井吉連	金貳圓五拾錢之部		金貳圓五拾錢之部	永田伴正	石川公一	武井正平	太田清藏	木村美豊		
品川衛夫	久保招藏	金貳圓五拾錢之部		金貳圓五拾錢之部	永原通	伊藤正信	近藤至	武井秀實	太田清藏		
久保招藏	木村美豊	金貳圓五拾錢之部		金貳圓五拾錢之部	武井秀實	境野大吉	武井正平	太田清藏	木村美豊		
廣堺	公孝原上	金壹圓五拾錢之部		金貳圓五拾錢之部	武井秀實	石川公一	武井正平	太田清藏	木村美豊		
廣堺	公孝原上	金壹圓五拾錢之部		金貳圓五拾錢之部	武井秀實	伊藤正信	近藤至	武井秀實	太田清藏		
砂川雄健	佐藤幡鶴	金貳圓五拾錢之部		金貳圓五拾錢之部	武井秀實	境野大吉	武井正平	太田清藏	木村美豊		

金壹圓貳拾五錢之部

中島繁太郎

金壹圓之部

春山長閑 岩品武脩 矢内俊夫 坂田爲綱 西澤秀藏
石原重外 上月豊蔵 小山田退藏 松崎左平 大橋信夫

浅川莊 佐久間秀徹 嶋村清時 砂川雄峻 字野秀壽

新井小八郎 藤沼芝司 永井恒明 宮田政樹 橋本導亞

石本羣象 市川寛信 鷺鴟 堀石坂孝一 竹内鉄次郎

堀口貞平 岩篤 多賀重用 三侯秀彦 深瀬種堅

久松定一大島 鶴本多公敏 近藤元孟 利根川

犬塚倫一高須傳内 池田玄道 上田直現 神戸綱五郎

鳥山時保 鈴木悠久 塚本政水 野丘 杉山俊藏

堀口俊郎 武藤秀茂 天澤方磨 村角半外 船戸拙也

星野錫 小島良也 大谷正誠 赤堀 威中島一可

奥村一次 管沼留五郎 伊良子重夫 設樂近知 五十嵐三郎

金井亂太郎 小林市次 水越成章 荒木虎象 砂川貫一

藤野文雄 渥美 遂古市公威 大平良菴 中島磯五郎

和田銳太郎 安藤巖藏 兼子兩平 大島定 伊藤潜

本多勤正 知野口貳 貫高橋練易 太田源次 野口雷堂

金八拾錢之部

金七拾五錢之部

八幡音吉 石山秀誠 符野永秀 卷四 田中亨平 松内則光

寺尾正信 片山佐知矢 木村秀義 野口吉次

金六拾錢之部

坂井訥藏

金五拾錢之部

高須 順郎 坪内 鮑次郎 井上 弘 河村 甲子太郎 大河内 貞造
梅澤 俊孫 伊藤 善次 平宮 内二朔 天野 軍 欽山 政之
横渠 俊章 中島 良知 松本 義信 角田 義和 高橋 謹次郎
生形 太郎 村田 行中 久米 碩志 長澤 信衛 島山 皋
永田 成訓 森田 荣 梅澤 秀芳 加納助一小林 彥次郎
福本 行中 前田 利義 氣松 寸八 高須 定山 井景恒
多信 春 沖倉 葦也 金井 虎司 松下 高覆 福田 政雄
高橋 敏二 永田 成器 小林 正吉 高橋 正五十嵐 久能
發田 善平 高須 水茂 村角 小才次 吉田 豊彦 福島 政五郎
福島 直海 鈴木 葵 三浦 圓平 太田 孫七 福島 政五郎
日下 近次 寺尾 成雄 明石 羊二郎 武鹿 次神戸 平市
中新井 修紀 浅井 例 佐野 錠次 太田 雄三郎 野村 寅藏
南澤 順清 大山 柯 中根 靖 小林 伊次 永越 文叟
橋本 漢 宇野 沙 芳 岩田 館太郎 渡邊留吉
大塚 舊功 龜山 沙 芳 岩田 館太郎 渡邊留吉
出淵 功 亀山 沙 芳 岩田 館太郎 渡邊留吉
清野 松柏 金澤 傳麵口 征綏 五代又七原淵作野
芦谷 信志 布川 文雄 加藤 太郎 金井 益雄 斎藤 五平
長谷川 信綱 山口 善三郎 富田 孫太郎 金井 益雄 斎藤 五平
龜井 無二造 上野 義 伊藤 申三郎 富田 孫太郎 金井 益雄 斎藤 五平
神原 正恒 内野 義 伊藤 申三郎 富田 孫太郎 金井 益雄 斎藤 五平
寺尾 敏一 松原 勝行 吉澤 五郎 境野 丹治 村田 幾次
高橋牛三郎 矢口 行衛 野尻 重一 本多 平馬 石川 申一郎
高橋牛三郎 本多 原正 桂原 良久 須藤 潔
服部 悅威 本多 原正 桂原 良久 須藤 潔
三侯惣太平 三浦 浩 三中島直惟 増田 良藏 今井 錦秀
茂木 重翼郎 中川 清長 井石藏 松崎幾太郎 梅澤 默
五十嵐庄五郎 宇野 新太郎 深見 橋蔵 古谷登太郎 太田 久七
茂木 石田 吉川 吉重 木村 恵 宇野 新太郎 青木 整

上野 梅三 服部類藏 秋元止馬 鈎谷九郎兵衛 高橋直方
小神野孫叟 河合三五平 和田義種 中根 莊岡 部寸藏
久松^{久松毛}數馬 青木清高 女屋勇吉 細井度常 服部淳
篠沼穣衛 佐藤矩之 河合孫一郎 都筑十郎 秋間重次郎
三木成孚 稲谷壽胤 閑野宗保 河合舛吉 宇野友太郎
杉笛丘大椿 策中村兔足哉 池谷往一郎 金澤政男
永井蘿太郎 野口 野吉田耕次郎
以上

合計

人員 三百二十二人
金員 四百貳拾五圓八拾錢

蘇集總額

○出納精算

内仕拂左之通

金四百貳拾五圓八拾錢

石工八右衛門渡

但碑石臺石碑文姓名鐫刻及運搬建立費共

全 上

金百六拾六圓五拾錢

但石燈籠二坐燈銘姓名鐫刻及運搬建立費共

龜山雲平渡

金貳圓

但撰文依賴侯二付筆墨料

松平惇典渡

金貳圓

但撰文揮毫依賴侯二付筆墨料

支那人劉香琴渡

金五圓

但撰文批評乞侯二付謝儀

長茨渡

但石燈銘撰擇及ヒ同銘揮毫ヲ乞候ニ付謝儀

金六圓七拾貳錢

石工八右衛門渡

但御邸御實家及ヒ金五圓以上出金者撰文者筆者其他ノ者ヘ配付セシ
碑文石摺料

金拾圓

全上

金五圓

但獻備品谷中御廟前ヘ無添設置清ニ付石工搬夫共酒代

酒井家令扶渡

金九圓貳拾錢

但御祭典之節幣帛料トシテ獻備

耕文館渡

小以金四百拾四圓四拾貳錢

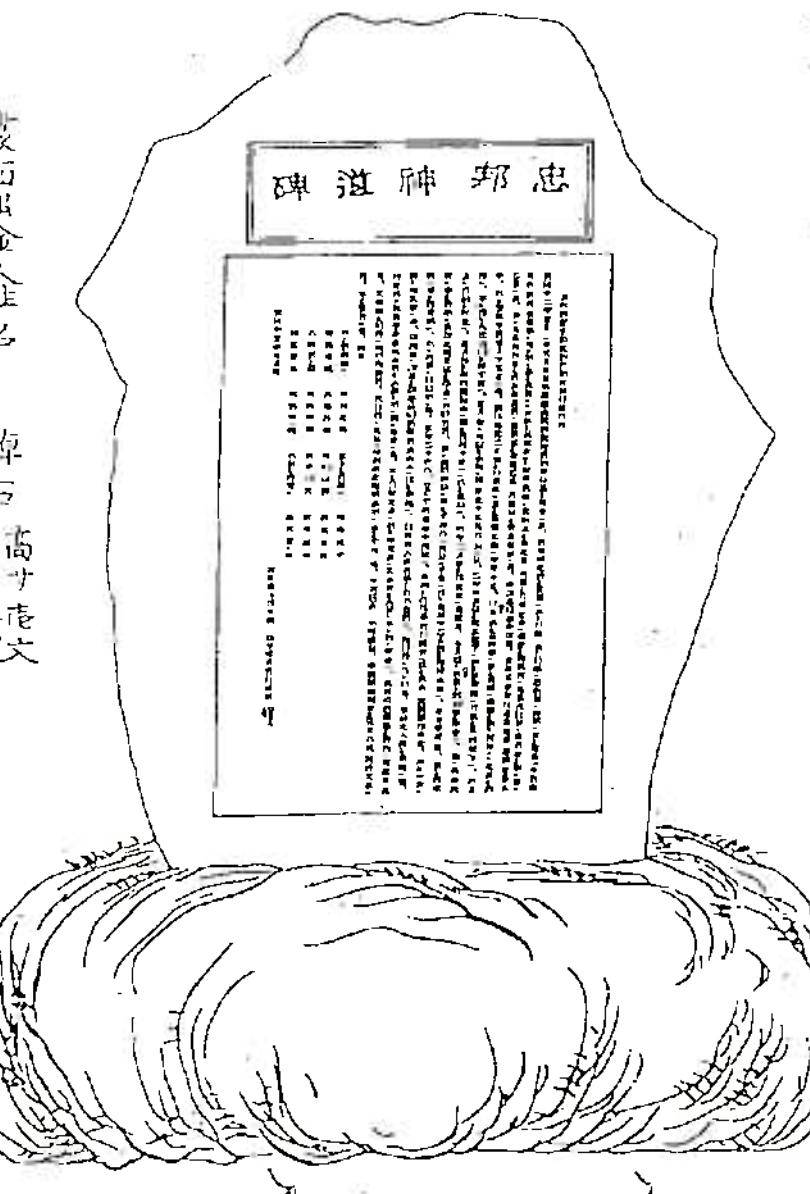
金拾壹圓三拾八錢

仕拂殘額

但本頂ヘ醸集金總額中ヨリ前諸頂ノ費用ヲ支弁シタル殘額ニシテ此中
ヨリ報告書石摺等ヲ出金人ニ配付郵便稅及本件ヲ結了スル節要スル所
ノ諸雜費ヲ支弁シ其殘額ヘ點燈費トシテ酒井家令扶ヘ相渡シ候積
右精算前書之通ニ有之尤各頂諸取書類並末頂内肆明細書ヘ取束子酒井家令扶
差出置候此段及報告候也

三拾方之壹縮圖 總大高丈三尺

墳石高一尺三寸



忠邦神道碑

袁西出金人姓名

梓石

高才唐文
幅五尺

四拾方之壹縮圖 總大高丈三尺



袁西出金人姓名
梓石高才唐文
幅五尺



袁西
明治二十一年二月

十九八七六四三二一及

○旧姫路藩主故從四位酒井公神道碑銘

明治十二年三月二十五日吾 旧姫路藩主從四位裕

兼酒井公捐館矣夫吾儕之於旧藩主於祿長於學恩

義累世不啻海岳今我寒而衣饑而食者不可不思其所

由雖氣運有遷公義有在然及 公之世名絕君臣之分

藉分離東西追慕之沈於 公最有不容已者矣於是衆

相謀建碑於 公墓前並獻以石燈二座乃謹記 公

之 梗概焉

公諱忠邦幼字班藏文族 旧伊勢崎

藩主酒

井忠恒君第九子以安政甲寅正月十五日生

明治紀元

二月養於宗家更稱直之助年甫十五時吾

藩坐幕府事 蒙

朝謹 公將伏 闋謝之至大

津不得入遂自侍 罪于藩五月有

命統宗祀而

茅土十五万石如故

一年正月叙從五位下任雅樂頭尋

叙從四位下六月上納 封土是月任姫路藩知事賜旧

封十分一為家祿四年二月移籍東京遂家焉七月廢藩

置縣因免本官先是 公大有志於學公務之暇常延學

士而講習焉至是慨然欲 遊于海外遂請于 官

得允以十二月航海於米國居

三年而帰整理家政紹

繹前業未幾羅肺病終不起享年二十有六卒于府北谷

中埜域 公納 西尾忠篤君養 女為夫人実 故

顯徳公女生一女於是又有身宗族定 議以 顯徳

公孀室 顯寿太夫人統宗祀既而 夫人 分娩舉

男名 忠興蓋行將為嗣也初 公之入統宗祀 也

時情艱阻藩事亦多端必有人所不能忍者至以貴顯

之身跋涉万里又必有人所不能耐者然而 公已能忍

於內而家道興焉又能耐於外而學術修焉天若假之以

年則 公之德業必不止于此也今則已矣嗚呼痛哉米

遊顛末別有從臣高須鷲碑文在焉不復贅也銘曰

有鬱其龍 維城之隅 爰卜佳域 噩公鑿乎

世路崎嶇 其德乃進 海濤澎湃 其氣愈振

具膽所屬 倏玉山傾 漂乎行実 赫兮声名

諸臣旧誼 蘡蘋奉祀 名勒碑背 公其鑿比

明治十三年三月建

旧臣 亀山雲平撰文 松平博典書并篆額

日姫路藩主故従四位酒井公神道碑銘

明治十二年三月二十五日吾が旧姫路藩主従四位酒井公館舍を捐つ。夫れ吾
か舊の旧藩主に於ける、縁の長きに於て学の恩義に於て、累世にして嘗て海岳
たらす。今我寒にして衣、餓にして食する者其の由る所を思はざるべからず。
氣運遷る有りと雖も公への義有る在りて然す。公の世に及びて名は君臣の分を
絶ち、籍は東西に分離す。追慕の情、公に於て最も^レを谷れさる者有らん。是
に於て衆相謀りて碑を公の墓前に建て、並びに獻するに石燈二座を以てす。乃
ち謹んで公の梗概を焉に記せん。

公諱は忠邦、幼にして字は班威、支族旧伊勢崎藩主酒井忠恒君の第九子なり。
安政甲寅正月十五日を以て生まる。明治紀元二月宗家に養はれ、更に直之助と
称す。年甫めて十五。時に吾が藩幕府の事に坐して朝讐を蒙る。公得に闕に伏
して之を謝せんとし、大津に至るも遂に入るを得ず、遂に自ら罪を藩に待てり。
五月命有りて宗祀を継ぎ、而して茅土十五万石改の如し。二年正月従五位下に
叙し雅楽頭に任せられ、尋きて從四位下に叙せらる。六月封土を上納し、是の
月姫路藩知事に任せられ、旧封の十分の一を賜ひ家禄と為す。四年二月東京に
籍を移し遂に焉に家す。七月廢藩置県あり、因りて本官を免ぜらる。

是れより先、公大いに学に志有り。公務の暇には常に学士を延きて講習す。是
に至りて慨然として海外に遊ばんと欲し、官に請ひて允を得て十二月を以て米
国に航海す。居ること三年にして帰りて家政を整理す。前業を紹繹すること、
未だ幾もあらずして肺病に罹り終に起たず、享年二十有六。府北谷中の塋域に
穴る。

公、西尾忠萬君の養女を納れて夫人と為す。実に故頸庵公の女一女を生む。是
に於いて又身も宗族に有り。定め議して頸庵公の嫡室頸寿太夫人を以て宗祀を
続ぐ。既にして夫人分娩して男を掌ぐ。名は忠興。蓋し行は將に嗣と為さんと
するなり。

始め公の入りて宗祀を續くや時、情難阻にして藩事も亦多端なり。必ず人の忍ぶ
能はざる所の者有るに、貴顯の身を以て万里を跋涉するに至る、又必ず人の耐
ふ能はざる所の者有らん。然りてして公已に龍く内に忍びて家道焉に興る。又
能く外に耐へて学術焉に修して天す。若し之に仮すに年を以てせば、則ち公の
德業必ず此に止まらざるなり。今則ち已む。嗚呼痛ましいかな。末遊の頸末は
別に従臣高須鷺の碑文焉に在る有れば復た贅せざるなり。
銘して曰く

篠たる其の隠 織れ城の隅に有り 爰に佳域をトす 懸公の坐なるか
世路崎岖として 真の徳乃ち進み 海濤澎湃として 其の氣愈振るふ
異きに属する所を聴るに 俊ち玉山傾く 露たり行実 赫たり声名
諸臣旧誦 繁頃を奉祀し 名を碑背に勒す 公其れ監比せよ

明治十三年三月建

旧丘 鶴山雲平漢文 松平摩典著付篆額

注
累世 代々

畜に海岳たらす ただ単に海の深き山の高きなどに比べようもない。

便輶 あらすじ

闕に伏して——禁闈（朝廷）に平伏して謝罪する。

罪を藩に待てり 藩に戻って罪のご沙汰を待つた。

茅土——領土、封祿。

塋域・墓地。

宗社を統ぐ 先祖の後を継ぐ。

蕃事も亦多端なり 藩として色々と大変流だしき状況。

万里を跋涉する 遠く（アメリカ）まで出掛ける。

夭若死に。

贅せず 余計なこと（贅言）は言わない。

隣 小高い丘。

佳域をトす・墓地として定める。

世路崎岖として 実社会での在り方が困難であるほどその徳が磨かれ、

海濤澎湃として 海の波が高ければ高いほどその意気込みも盛んになる。

終ち玉山傾く まだ若くして公が亡くなられた。

凜たり行実…… その行動は凜としており、その名声は赫々として輝いている。

旧誦 古くからある人々。

繁頃——桓末ながらに供物を捧げ。

碑背に勒す 石碑の後ろに彫り込む。

篆比せよ 見てほしい。

龜山雲平碑文集



龜山雲平肖像

龜山雲平頭影会

鎌山雲平



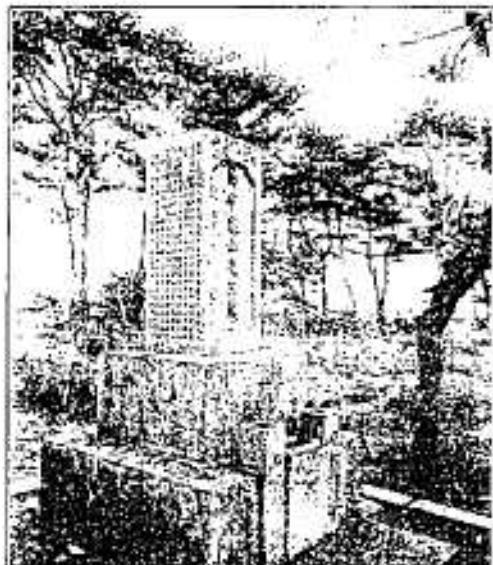
鎌山雲平

直下の傳法門人今井利行小春¹の其後し鎌山雲平²の通称をじゆうじやく。危由先師慈尊に詳し、曰く、「先生はぬ山義和、字は山之、号は雲平と號す。幼子は雲龍、通稱を「雲龍天翁」の門と曰ふ。家傳³を遺⁴譲⁵主⁶井公に仕す。父故五右衛門⁷、母故七田⁸の娘なり。六世の祖親五右衛門⁹成¹⁰將¹¹、尋¹²の才¹³目¹⁴て入¹⁵て鎌山氏を嗣ぐ。男子なきを見て阿波守¹⁶の用宗¹⁷大表¹⁸が妻の次男吉¹⁹とを養ふて嗣²⁰をなし聞するに止²¹三女を娶²²て、二

子を娶²³て、長を望十郎²⁴壽²⁵昌²⁶と曰す。次は母²⁷の先生なる。先生文政五年正月廿二日を因て號²⁸す。成²⁹して父³⁰所愛心願圓滿を請く。云³¹はる先生十一歳に江蘇校³²好古堂に入³³。後復³⁴南³⁵の筆に従³⁶して櫻痴を學ぶ。結婚後³⁷は妻賢房³⁸と號³⁹て通⁴⁰するなり。先生はに父を喪む。兄弟はと母氏を奉じ承拂⁴¹矣。其好古堂より宋に傳る⁴²の書⁴³を御⁴⁴ひ詰ら後⁴⁵一室に墨⁴⁶鑿⁴⁷と机⁴⁸を置して之を讀⁴⁹ハ光⁵⁰也。先生十八歳⁵¹を以て既に歸てられて好古堂の身職⁵²となれ特に授⁵³三品を賜⁵⁴り其後⁵⁵是役を續⁵⁶め。又其任⁵⁷持物⁵⁸即⁵⁹好古堂⁶⁰所掌⁶¹不⁶²に離⁶³れず。

感を更に足りぬに既學才將英主神社及諱師神社ノ所をも參ね、三十二年春宿を負ひ再び西へ、五月六日暮に到す。乍然七十九、時めの久先生の急に化すも嘗て多し、其聲を聽く迄は死せるはなし、遂に相見に尋葬の禮を立て越後十一日御薦式始充先君の傍に坐す。

先生始より温厚體を好み話題に駆使す、俊逸の在る事細か御算其事を悉不として止む、人となり既日漫遊昇菴相與者に至りて山せず身も休む事無なり、其人に接する深淺和諧にして其内自ら欣然として是不ぞむことの體あり、故に人一見其豪傑の優者たるに服す、而して行持が眞正、深入に對するにも亦爲若客に對するが如し、門入を詰するにも亦朋友の體を以て之を對して之を門生觀ざさざなり、其を學ずる節度にして尋望を好まず、御前御辭の體と是を見れば胸ち難う之を曉得す。吾て先生の體質にして讀者の體はアラ哉あり、先生之を讀み其妙を悟むに及て之を發達し極して之を送し以て其真髄を窺く、其間に感じ今に至らる處、數次恐を啓て先生の御體を問ふ、是を即ち實に相手の専なきもの空虚知たり、先生公體に於ける三十字通じは體を解すと別を因ずるもの曰々體を離す、或は一度誤次確を發せざる處す、遂に食する能はずして止むに至るる者豈なり、則へば是を堅坐をして活潑樂人となし以て中江先生の直江密人比す。御門外の來りて體を極めるが評を賦しと先生に贈りて左手の裏表に在るに比す、即て體質を論すべきなり、先聖學は洛昌を主として不變守せず、其辯才を發揮する間々として字句句讀し必ず此體を表す、尙も字句文はの解し徳きものに道へに當て刻々脱下せず之を解むに拘泥し必ず其體を得出て後に止むれ音と左那公には異なるゆゑ此體實體謂て文字を讀書も解し我らの間に前り御讀波は因られてト公信せず、先生の入る各持て之を讀む近頃にて之を讀す、其し體として讀あるを思てなり、詳解は紀伊を點めて難て此體を、而して後讀實體なり、文政は國風切前打馬人となリの如し、其本義を讀法を讀むと讀さん筆語讀法二種類の理すべからざる所あり、純乎に三三讀する者往々多し、吾を察する如系と正を右本詩文と解説既に久しく私疑等固く皆五七讀づ、其四方案體の如きも却



西漢太子曰少子

學び程段一書籍に御算す。御學勉勵同安南陸三編不野學之國語御讀
人と互に相切應の義理を據る。時に松本源三郎も在り。船井、詩文
を研習す。遂に書生改修文書となり。先半身道源にして御讀。未た世
で少しも隔てある。御學者体にて實行の君子となす。六年六月采擷の通
質に委嘱する。御元公御身を以て出でて御す。其間御宿す。此對に當
て先生も亦仰て御讀にして筆を送り。歌を贈ふの様あり。此年八月開先
公舉す。先生要に殿しむ。

講上下を若き學生冠軍に起
居し而て頭を絞る。以しし
て在學二年算成して御學業
を詔き江戸の前田の漢學に
あり。時に吉澤公軒を觀じ
て坐て空に嘆息す。後改二年
公成に従う。漢詩に通ひ、其
十日程既に老練の聲譽を被
り。高延元年十月頭陀公舉
す。初念欲退を以て己を制
され。既にして自心を察し。首を
縊り而は自説にハリにして活
命を取るべく意滿に多し。固
し先半身次の大功多なりと
いふ。國學公爵立す。其後
文久五年十一月公特に先生
を復讐して大日隊となす。登報學印知し。先帝御命にして公賜なり。
是に於て源平過然士氣大に盛る。元治五年九月以て縣二十石を御賜す。
されば後百六十石を合食す。翌年二月開安公國を貴顯御堂公に贈
りて走す。公の起に切々や國事公職の際に歸りて居。御讀を讀て忠守に
よりて大足元に走る。而して先生宮に大日隊を以て講に在り。公をして現
に在りて公典に尊美せしむる者先生の功難し難かるざるなり。明治元年王秋

東坡集

一念之悟，萬象之流。惟是傳道於諸侯，不
妄作爲。尤色古來，無能敵者。此其與天和
混而爲一，無以易也。故曰：「天地萬物之
生，皆有理焉。」此其所以爲萬象之主也。而
吾子之學，復以爲我執事之傳也。蓋予之
所見，以爲吾子之傳也。予之傳也，以爲吾

九月再び東郷公に傳達なり。四年正月御書をひさすを終事方に頃りて
二才、六年七月同を御原御社に奉ず。體に退て此處にとどす。此子彰
を貢授し猶々として應えず、家臣を多故舍と云ふ。嘉十七年秋江戸守
幕營舎を築き更に御海譲家と称す。遂遂榮り所ニ居はなし。二十二年
少卿正となり奉天監試験委員の職政就兵庫縣令其請定分所等白帝の體

○南宋魏了翁詩卷之三

唐宋八家文



顧宇衡山先生誕辰暨壯立紀念行八（大正三年）

位于本区之白石山地的人口密度较低，而且是支流的源头，因此，对人口有较大的影响。至于本区的水系，以白石河为主干，其支流有南流河、北流河、大河等。

建立年月

明治二十五年六月

撰文者　龜山　震平
書　者　龜山　震平
所　在　地　不　明

此碑之六面の記載はその碑文に記されば左に轉載す。

○ 碑六面の先生事蹟

先生姓兒島氏、號潤文、字達甫、號名彌三郎、號六其號。本姓三毛氏、系出宇都宮關西山三宅氏。其後移住於播磨國加賀郡小野町、爲「播磨吳通船親兵衛」及「寛永參謀」。小野守主一橋侯祐定、號潤文。而潤文先生在小野已十年矣。乃登三遠路船、列侍衛府兵、陞三遠候於小野二馬、以三其勤勞勳業、列士級。問「永世家譜」爲「小野町六年督轄、癸卯歲之、得至三遠利夫通稱新右衛門」。則先生父也。其配丹波國水上郡和田村前川氏女名榮子、以三文政四年卒。己未三月六日一些。先生卒於本籍小野町之自居處。先生有二兄四姉、長兄龜山剛迪、次兄潤文、父利央哉、先生弟慈助、家兄一、金爲、皆務農業。壬午年夏正月材齊、終好三遠路、作學三遠路。潤文於海學念才官授將仕、又入野之口五正家翁門、學藝與一秀殊。和歌、以自娛。先生第以布凡古事記草稿、在竹柏、歸至吉儀古武之形策、則別繪詩一則。

潤文、曾特號「健翁」。未、染、相張、十四年七月歿。

年十一月安。付諸移于備府監造。先生與有力焉。六年五月以三年老疾、壞家於吾子崇德、々々日見不肖無報一功。而徒手坐食何以代之。乃固辭。先生知其不聽、就極且聽之。先生又有所啟、破先人衣冠還宗廟。標語廢舊而諱之於玄考。嘗令蘇公良召。先生笑曰。以三朝之臣。置世之謀。危日凶年。舌路。壁。濟無反。京。深慮矣。先生答謂先生若安而諱。不必歸家祭。其附信不。以見三上龍也。於是公良亦上。請給之於主務省。無錢。請付。且取之今後三年之家業。先生感感微辭。和歌奉呈。先生笑曰。聖。小野乃宋野。乃我乃君。七月乃都仁。每布短志。是年八月。爲。備府縣。加東鄉舊社。因神社祠官。七年三月。爲。徵兵係。兵種表。六。將之。故。北大隅氏。益木。於此。翁歸。遇。小野。先生。與。其。恩。報。之。事。先生。深。諒。釋斯之初。翁在東京。爲。官。政。御。用。掛。未。幾。以。八。十一。歲。病。死。先生。服。膺。翁。遺。命。一心。苦。患。暴。甚。多。捐。其。半。財。資。之。之。至。八年。二。工。成。先生。時。猶。翁。祠。官。祭。祠。事。因。送。其。翁。弟。千石。見。國。當時。猶。翁。祠。官。祭。祠。事。因。送。其。翁。弟。千石。見。國。當時。猶。翁。祠。官。祭。祠。事。因。送。其。翁。弟。千石。見。國。

不能。善。其。委。曲。對。於。是。爲。家。國。舊。院。使。舊。二。傳。學。士。佐。史。學。翁。事。與。其。道。起。得。那。三。選。舉。一。幹。續。於。古。代。式。紀。那。其。功。也。着。得。一。奇。石。完。然。如。畫。首。是。全。體。香。氣。先生。愛。慕。之。藏。六。之。家。所。出。四。相。冠。十二。次。發。就。以。試。之。尋。九。擇。經。不。調。遂。以。爲。紗。工。先生。居。窮。窮。敬。紗。文。一。國。官。任。其。知。友。字。浮。多。一。原。氏。祖。祖。爲。源。氏。源。源。芝。邑。村。祖。良。縣。氏。等。交。職。最。厚。文。久。政。府。國。事。多。難。尋。五。及。處。三。年。丁。卯。十二。月。石。川。氏。第。晉。繼。其。明。年。乃。明。點。紀。元。也。則。延。壽。白。川。家。繼。下。延。水。州。滿。發。金。先生。與。之。來。連。寧。備。一。先生。襲。職。右。側。右。式。易。行。之。以。三。執。勞。一。列。士。族。一。爲。三。遠。路。一。於。是。故。三。姓。兒。島。氏。一。時。游。僕。用。宿。障。于。京。師。今。京。先生。忌。燒。娶。妻。崇。千。京。坂。間。一。議。論。太。方。又。自。以。爲。今。非。假。游。薪。日。之。秋。不。若。起。一。薪。舍。而。乳。三。路。庄。一。列。士。族。一。乃。白。箭。院。新。政。房。一。將。起。首。任。木。播。落。舍。一。而。宋。舟。尤。可。急。會。化。越。更。與。諸。將。同。參。朝。廷。道。仁。和。香。宮。殿。下。總。督。軍。隊。討。之。諸。士。亦。受。從。軍。命。一。物。演。曉。弱。先生。應。授。投。漢。周。族。竭。力。乃。宣。出。幹。而。人。心。安。而。至。十。月。本。府。商。會。亦。得。允。可。二。年。正。月。所。在。事。先生。功。顯。金。若干。與。恩。方。廣。然。其。商。會。日。始。淡。加以。國。家。多。難。先生。爲。其。商。會。判。司。職。一。尋。告。禁。

欵，便先生指之，故有此號也。後男得之到院主會，始休見三夜則還也。院主又有先生，今乞入九鼎園兒一舉一舉，男爵。大國計憲，請悉因使，更補十怒更，其中二氣男爵，之於天皇皇后御榮下云。後聞內帑金若干，先生之光是亦極矣。十七年五月朔，回鑿山武道曾亦出自福井安二萬，六月京都府開賞狀，是月東鄉是皇室守櫻賞，以一卷繪重賞命，任證主檢閱事。三月爲京師相國寺御前會議御前議員，且出自貴班。泡二葉，六月得賞狀及官賜，十月受御獎賞共進貪，亦出自貴班。嘉慶二年，得褒獎，十二月初，京都府掌給事中賞，任聖慈殿御前金印鑄印事。先生既無反復，終無顛迷，或色而絕之，觀者不勝而如其爲四平。其妙巧可憐，先生風貌，如繪之畫，真贊一興。先即美學館學士，佐元武及知耕之本部，有數三民等，相民，聽立一例，即半叶吉平氏爲督學，唐振，照振，莫之名曰谷塾社，隔月，同司志，相會，候令不廢，猶此而廢，十九年以二條城爲理官，今內省直營署事，與其所居京師，託

官道天井等處設於各風社，先生軍力，五月東京集會，
鼻煙發行，慶賀之候，先生一西歸，於是遠歸，
烟民營，一室，經年，二十年一月又游，蘇州有

建立年月 一九八〇年三月

著者	柳文潤
所在地	東京都台東區谷中墓地
(辨不明)	吉田一郎
	柳平 韶興



時當十二年三月二十五日，署色葉的謀主從四個都督
酒食，必請歸食矣。大否使之赴新開，並於城西某處
酒食，不若得近前就飯，則無事可辭。故遣使之就於公館，有不
容已焉。英毅是日相見，既醉，公幕門許氣石，是二月廿五
記公之被廢，深以忠義為守底柱，及至酒後，便勢利薄主，酒
井若黑，恒與九子安、政、甲寅正月十五日生，明倫紀元二
月，葬於京郊，更無由之歸。年甫十五時，香港東南府事，被
榜為公將軍，因請之至大津，不果。入還，自負弟子，歲在己未
年，任縣尹，而反被閩侯下。六月上表給土，是月任鹽
務局總事，關省貢十分一，為鹽課，四年二月，改任東京通
家焉。七月，廢帝遷廬，因爲本官，先是，發大布車，於學宮移
之廟，帝延年，士面誦詩，君是歲，女為夫人，上數顯憲公女，生
官郎大，以十二月初吉，於米瀨原三年而歸，娶御史知政，加
辟第，采木，號爲辟厥，終不歸。至年二十有六，卒于先君
中堂，成公所西也。君忠愛賢女，為夫人，上數顯憲公女，生
一女，於是又有君。草稿堂，以識德公始富，初嘗太夫人
被服，其氣質，而夫人分其美，尤者，忠愛賢女，行持，名聞邑
之大，曰：君，忠也。忠也，皆其母也。當時，當下，不多如有人所不使忠善
者，謂之女，忠善者，又有人所不能忍者，然而公惟忠善，
內，又能順於外，天祐以之，以年則公之忠善，必不亂乎此。
也。今則已矣，嗚呼！憲公，雖未報家，而有報臣而報君，文
在焉，不復質第，
有君其能識足之，或冀上，其誠，忠公至手，豈難哉？其然
乃後，而忠善，其氣，忠善，其母也。當時，當下，不多如人所不使忠善
者，謂之女，忠善者，又有人所不能忍者，然而公惟忠善，
內，又能順於外，天祐以之，以年則公之忠善，必不亂乎此。
也。今則已矣，嗚呼！憲公，雖未報家，而有報臣而報君，文

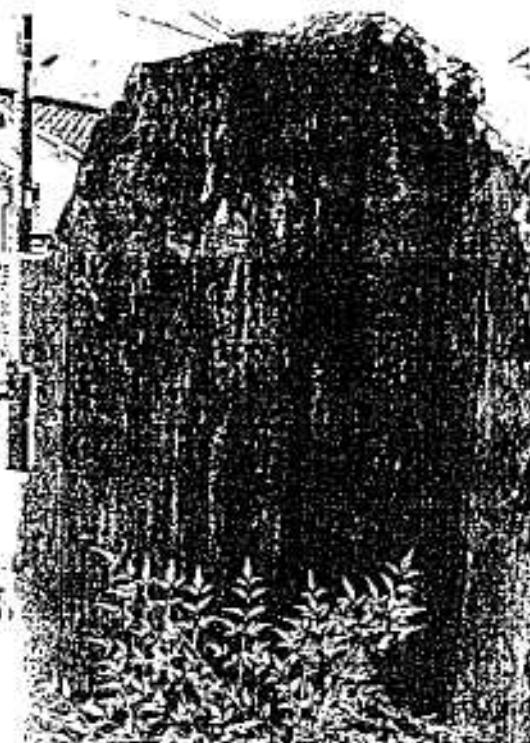
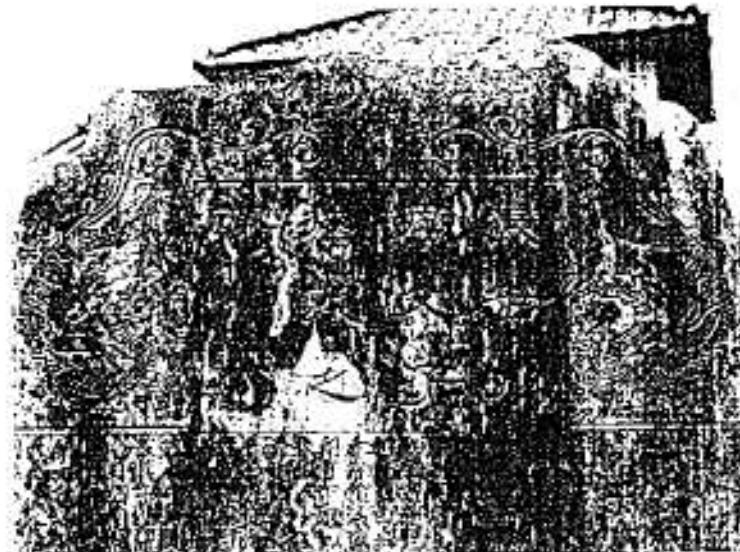
先生後	女已	君子曰	白	君子曰	白	君子	腹
厭來	延	之	之	範	白	范	腹
系出	忠臣	後					
文學	原	象	典				
雖九	難	何	巧				
功	績	聲	傳				
行	故	吁	亦				
不	所	政	濟				
明治	二十	有	五	年	夏	六	月
於	煙	燭	城	南	海	上	白
新	柳	村	南	村	觀	遊	蕩
柳	下						

- 19 -

故呼此號益聞而人爭傳以爲人事。豈竟謂前賢所贊不得也。於一樁或發前賢後哲崇父不復能之教其子，子不得傳之於其父，也然各執其所改之事而其終復相承焉。若長谷川君父子是也。君名昭治爲考，老號一風，其子川西，以次第奉祀。至於昭治，因號成年號尊爲號。昭治有十元君，昭治子於昭治而稱其氏族姓，無庸贅也。即日本民族之大端曰「姓」之用，君其遺也。君在嘉一年，告大端禮，不無身死以報。生年己未七月廿九日，不幸革疾而薨。著林中九月，葬于子吉良者相鄰家。葬於總理院正門，並請要於家為寺落塔。此皆先生天祐之次，以指使焉。蓋於己未氏正二女而第娶君之屬諸也。我既相鄰，發入葬，貴外次男也。不為釋服，則請長谷川君女是也。君。

君幼名已經二歲，更號昇龍，及長，以善水性，與弟於廢路安政已亥承昭治馬君，而掌絲翼，三十石。號七十石。國語明云：君幼與弟已亥入選專修文部省，官就全面正科，成績丁卯清貧學業，作長治於東京及關西，開始成員歸國。尋赴法華總裏國會講之學。一年，官地轉移，一派外國交際大臣，於某家勤各細教師，以學生就右，卒入校，夕歸若素，不調。庚午八月三日，君以日歸，自來國無事，主司帶有日恩家，欲別於父兄親友，請知事，得四德譜，并公序，貢之。九月廿九日。

長谷川君父子造像碑
建立年月 明治二年十月
撰文者 龍山 雲平
書者 井上 松香
所在地 総理大臣府地藏院境内

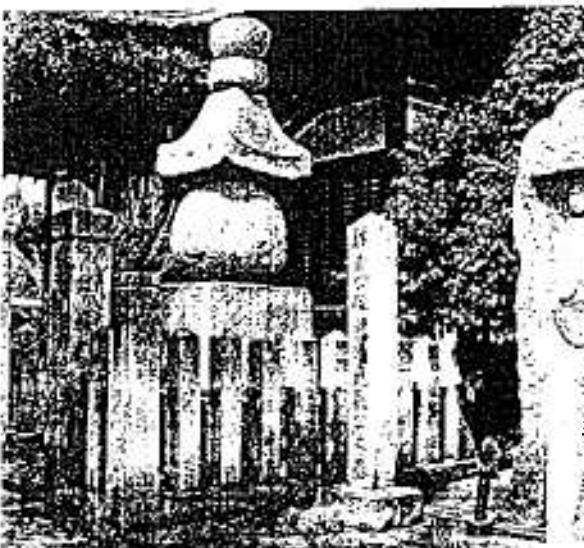


寶慶府志稿卷之三十一

庚子年四月

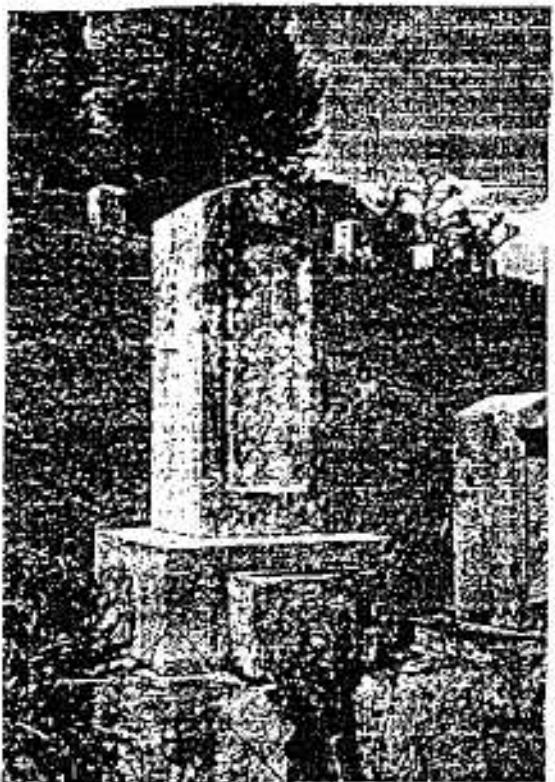
卷之三

(碑建立せず)



角田義方（心地）之墓

撰文者　龟山義和
書者　達部瑛
所在地　滋賀縣名古山町
　　名古山盛苑



趙爽先生著過百部算學書，方、少貢大貢數學一時頗稱
子年，號諸君爲算學家。

詩詞

426 (2)

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

華嚴經疏解卷之二

卷之二

卷之三

五言律詩

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

本居宣長の著述

卷之三

卷之三

廣雅



哲文軒松草庵碑
建立年月 明治二十八年二月
撰文者 王和甫
書者 魏山
所在地 墓地



哲文軒松草庵碑
建立年月 明治十四年三月
撰文者 王和甫
書者 魏山
所在地 墓地

哲文軒松草庵碑
建立年月 明治二十八年二月
撰文者 王和甫
書者 魏山
所在地 墓地

至六百石。生性洒落，為豪爽，又時為半奇賈。明治老矣，
看厭法古務，又發名於文武，每負有才，故不輕自謙文辭。
十氣神，以火燄為先，其助火也，亦外祖事之弟也。長子
之勤，著《詩說》之注，心於教育，卒之時，嘗以明公為題，
一山省曰：仁者山焉，則造學全致，德望尤高。其孫曰：方名，
以幼教化，而歸耕於家，其業甚興。宋史時，與其弟輩之時，常有
手書詩詞，竟先生之七歲，既已能詩，水極通石等書法，若長
於漢、魏、唐詩，外皆十二三首。已時，對是詩，得其音韻，文辭。
詩曰：此詩第一首，其筆下中聽，猶所習詩，雖無野白草，
但有聲，等老矣，讀過其史，又學其詩，故在於詩，未嘗不
大失其妙，後更努力，其詩，較較然，有天山之安穩，以西
二組，獨善其美學。及期滿中興，斯生某公，號爲「活龍」，
即老矣，先生亦風義，下第四年，遂棄官，退一隱，詩歸，若
否，即通音，則始及三十，云，及出第，下縣授徒，教君者二千
人，先生寡白，余以文爲命，若死則以文祭之，可也。其子
文，如此，又點茶，相謂以自遺，及忘，再奉江都，故名，
經未幾，明治二十一年，成子，卒，年，終，不超過，至三月三
十一日也。享年六十，是日，哲文軒松草庵碑出，其子
即委，送歸，尾氏，次大，內，氏，次，田，氏，次，尚，氏，其男女
子，四人，皆男，右，高，大，胸，肉，而，有，故，為，質，體，五，終，二，男，乞
大，胸，內，程，氏，山，副，家，張，安，張，國，氏，次，女，四，子，五，子，都，兵，乙，次，女
與，其，諸，子，相，親，以，其，四，月，二，日，葬，先，生，於，縣，城，北，埋
墓，白，夫，妻，之，屬，老，香，祭，先生，之，知，遇，以，其，而，就，方，誌
日，
八，世，事，告，一，甚，名，臣，道，手，行，道，將，子，而，祭，其，而，已，而，
已，而，悲，感，其，文，擇，其，而，

邑內古今之碑

建立年月

撰文者 豐山 蔡平
所在地 鞍路市王新興 二
必立寺墓地



鞍路市王新興 二
必立寺墓地

建立年月 明治三十六年二月

撰文者 蔡平

所在地 鞍路市鶴東町八重原
春日神社境内

固本推源

此碑系某君之子所立，碑文如下：

固本推源，固始基業，固有以成其事。今碑之碑主，其諱
名氏，固不知其人也。然大而國，小而家，固有不以不存于世者。
故名之曰「固本推源」。其碑文之碑主，固不知其人也。然大而國，
小而家，固有不以不存于世者。故名之曰「固本推源」。其碑文之碑主，
固不知其人也。然大而國，小而家，固有不以不存于世者。故名之曰「固本推源」。

碑文(明治三十六年二月)
蔡平

馬頭古井

吾家家定過客太久居，又與安國母本多氏以文及丁未
八月二十一日生在鹿甲谷熱父號器錄因石碑水已
而為之祖子子生天目村，字雲飛，本性勤格，足疾，身
小，遂相傳醫事半日久，父高齡，營圃田作，歲豐歲歉，年
皆相傳，代次，及更娶，歲數，其家積有錢入，有財，有
力，著地廣，一房，皮被，被面，及，及學，無經，惟，所，日，角，枝，若
千，其為小灶，猶為，有五，西，鋪，設，及，起，山，西，屋，等，斯，義
皆其，決，這，事，而，說，首，體，最，上，下，服，其，衣，真，神，四，組，皆，物
者，千，宋，裏，使，這，一，說，應，有，兵，馬，之，難，亂，君，連，當，年，得，和，
馬，方，西，城，分，店，恭，德，崇，外，謹，待，及，諸，諸，日，不，豫，期，各，尊
吉，慶，頤，和，樂，有，主，從，對，如，卓，然，而，給，我，家，群，一，夏，人，心
懷，大，如，煙，往，東，行，歸，送，學，以，現，新，免，去，人，已，下，歸，夫，人
於，京，都，而，還，以，身，有，恩，遇，歸，既，曾，累，有，敬，或，指，盡，後
燒，事，想，手，以，有，首，燒，而，陽，二，顯，萬，而，福，香，天，承，身，以，見
昇，昇，延，胡，前，二，年，己，巳，五，月，二，十七，日，也，宣，漢，生，道，他，忠
誠，遵，此，燒，支，老，居，士，將，子，上，升，時，妙，立，支，君，之，空，將，公
持，此，說，有，朝，之，及，言，不，起，也，公，本，通，便，中，且，將，自，領，者
于，以，此，公，發，都，而，皆，發，諸，大，臣，也，先，聖，之，風，聲，威，呼，突
厥，只，突，更，參，附，上，其，市，一，安，武，帝，一，突，厥，燒，諸，井，
凡，一，弟，看，於，利，石，源，井，上，氏，一，九，看，於，宜，不，氏，於，昌，日，氏，
先是，害，六，步，步，多，信，步，次，子，尊，禪，正，是，承，禪，不，肯，安
居，也，設，話，作，贊，但，
若，之，中，所，燒，就，鳥，燒，定，石，燒，屬，吉，德，善，道，刻，在，耳，其，見
之，特，功，發，有，步，助，之，貢，與。

新編 田口鑑藏集

明治十九年六月
建立年月

文者者所在地位山雲平

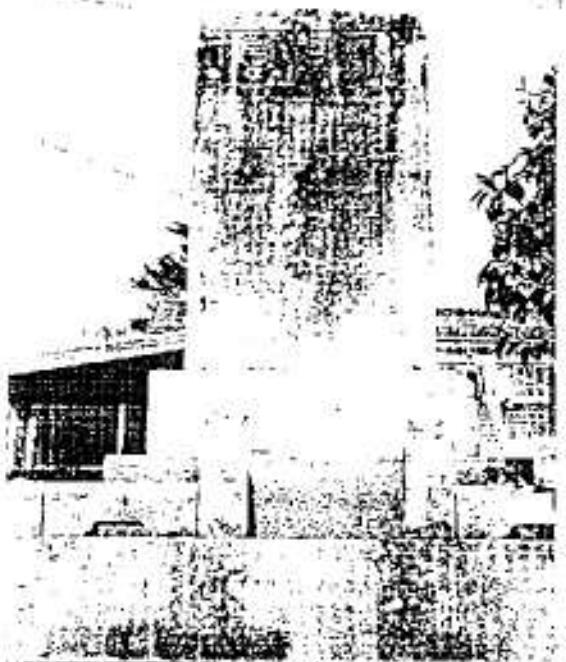


清風徐來，水波不興。一葉扁舟，橫於江面。舟中人，悠然自得，不知是處。忽見一老翁，持竿垂釣，其人曰：「此地無人，何以垂釣？」老翁笑曰：「吾非垂釣，乃垂心也。」問其意，老翁曰：「吾心無事，故無所求。」問其事，老翁曰：「吾事無心，故無所為。」問其求，老翁曰：「吾求無事，故無所欲。」問其為，老翁曰：「吾為無心，故無所畏。」問其心，老翁曰：「吾心無我，故無所依。」問其無我，老翁曰：「吾我無物，故無所歸。」問其無物，老翁曰：「吾物無我，故無所守。」問其無我，老翁曰：「吾我無物，故無所守。」問其無物，老翁曰：「吾物無我，故無所守。」問其無我，老翁曰：「吾我無物，故無所守。」問其無物，老翁曰：「吾物無我，故無所守。」

內山先生集

立年月

撰文者　龜山　雲平
書者　藤井　万寧
所在地　加西市田谷町　宇仁



に入り塾弟子となつたが、秋元をして小學教員となつた。そして郷社八王子神社の祭司を兼務し、明治二十三年に退院した。明治十九年一月行年四十三で歿しが、その生前、門生及び地元の有志のその祀を表す廟所を起したため碑を建てた。碑文は次の通り。

鴻林院訓導內山隆健君起居之碑也。村吾第之祖西馬坂正村入元年辭官歸家之後學於丹波守史翁本玉堂者六年。其時有小木
校之設在焉。為左林寺御小學長教員。號萬中。然此八年半終於林
寺補大比數種中講義又為山東小學教訓。訓義又為仁石郡小學校
校訓。身此二授者因以學訓及專科學更而稱其名耳。其實其官同二
校令也。二十一年署神體朝用力量及教務之首尾。故此校以教育
生徒凡二十三年矣。不厭孤獨其勤撫愛無疑。今計二十九年矣。
為一校新老校舍應民營役不日成之有有為其首者。鄉黨慕焉。君
爲本郡各小學校校長歷有數十年。及以驥路繁劇。棄官歸。不一
而是空谷之教育者。善于人。此經教員。時有異議。而皆村中生
徒受其之教。皆以建立者而無怨。自外所來者。信其甚。自公移日。自
家私計。虛渡其風。吾每士。若教員。也非君之盛德。學于人心。始方起。
子他校例。可以証。而此有志。然都。却。不。蒙。此。一。時。勸。其。勢。急。以。廢。於。

卷之三

古文 碑記社田園碑銘

建立年月 明治二十八年五月

龜山 雲亭

著者 加西市坂本町
所在地 一乗寺境内

要稿建園 賀茂村西國坂の人で開拓である。その開拓は寺に左の通り記してある。

先坐達安藤氏眞原守子賀茂郡中平林園眞鏡堂碑記西國

眞原郡内賀茂現存人其地領務事務課御日安良親先生體樂
万山考課仁通相應早付各印其以文政十年八月四日生先生
於家先生名恭原太閤第東原仁吉馬秀及御前御門谷英告又

從西山縣被色部大源發源經縣方津度等寫考而學道培表
醫病者并號家業其苦病有奇效乞病者曰桂雲先生爲人沉

資在款不輕過幅深人因和新氣論社陽安改文久幸謂高橫洋
人榮譽是吾清豐發獎士莫以一擇競易刀筆會方信更書諸

武信詔此無以身服之用曾自號號九龍齋因有鑑識而號老父
齊合氏叔之公權主格斯美其宗氣亦可以想見也至以詩言

命夏院之未及成功以明治三年十月十六日薨于室年四十
十四非千越中分毫毫毫毫毫毫毫毫毫毫毫毫毫毫毫毫毫毫

唐美喜平次三男以爲賢配以妻女繼齊翁曰高貴賢淑又承
一男即嗣他家先生壽人德一不勝是以憂樂門生或承者亦承

夫因相謀徵第先生達一與以無其行事於不朽使君聞其聲且
篇之曰

一上慈舟 去穎延仁 寸心豪情 其義是解一病君之宿
平誠之人 天志五年 中興勸臣

明治二十八年五月

龜山雲亭撰



龍山寺碑記

建立年月 明治二十六年四月

著者 加西市坂本町

撰文者 龍山 雲亭 (愛石)
書者 馬布 公寧

所在地 加古川市平野町山角
報恩寺境内

○ 年莊村長謹啓知者請君表慶記

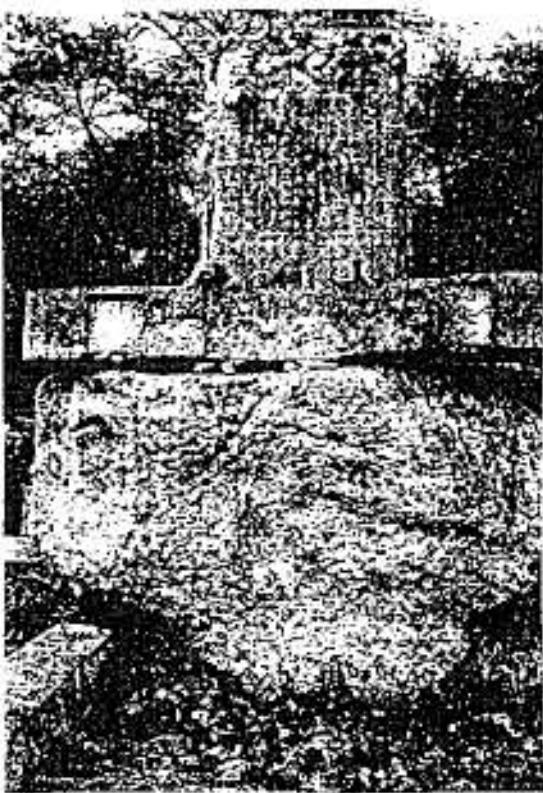
無德而有、功、而、之、徒、功、有、德、而、有、功、而、為、
立功。吾承、其、人、而、活、之、門、而、活、之、而、其、人、而、活、
也。姓高氏、名石在治、父曰、利事治、君則其男
也。以、天保十一年十月十五日、生、性忠實、處事
不、苟。明治二年、娶、忍寺、爲、本、郡、芝、野、里、正、
即今春老村也。明年建、大、里、正、格、許、事、勞、力、
用、膳、算、五、年、以、陽、消、經、合、爲、則、戶、長、七
年、爲、一、等、戶、長、未、幾、擔、磨、經、合、爲、則、戶、長、
既、移、任、職、中、新、村、戶、長、並、有、課、稅、及、兩、村、制
施行、免、為、今、村、長、其、爲、戶、長、也。舉、授、學、務、
地、僚、輔、經、理、事、以、墳、地、路、收、稅、惡、庭、僚、所、等、不、
敢、忽、之、必、憲、其、心、焉。是、以、經、理、課、稅、貢、賦、
不、一、而、足、終、至、每、易、易、經、理、課、稅、之、榮、似、其、成
員、能、繼、續、貢、慶、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、
君、之、成、功、出、於、一、枝、其、得、不、失、之、零、歲、成、成、

古文、勒、碑、記、碑、以、爲、後、代、鑒、云、云、

明治二十六年四月 日

龜山雲亭 訂正 爰石

亟、第、第、功、一、旌、之、四、字、是、兵、庫、縣、知、事、周、布、癸、平、氏、的、筆、
なり。



内閣文庫十一編 藩政編

建立年月 明治二十四年七月

撰文者 龟山 勝平
書者 長 美
所在地 加古川市志方町西牧



明治二十四年七月
建立年月 明治三十年五月

撰文者 龟山 勝平
書者 長 美
所在地 明石市二見町不動堂



明治二十四年七月
建立年月 明治三十年五月
撰文者 龟山 勝平
書者 長 美
所在地 明石市二見町不動堂

明治二十四年七月
建立年月 明治三十年五月
撰文者 龟山 勝平
書者 長 美
所在地 明石市二見町不動堂

明治二十四年七月
建立年月 明治三十年五月
撰文者 龟山 勝平
書者 長 美
所在地 明石市二見町不動堂

○ 内閣文庫十一編 藩政編
功徳碑。詩一首、而舊民不前。忘者、其內則故十
郎君乎。君名盛明。以天保四年癸巳九月四日生。
於播磨之印南郡吉佐郷。父森盛之、通稱太左衛門。
母武田男也。九年戊戌歲爲木齋大里氏。貢自三
父至君三世累其職。及明治中爲爲縣長戶
長門書紀等。忠之於本領。此功徳不絕。枚舉。
若其最著明者。安政二年乙卯郡中新興土浦。者其
堤防加高發尺。其工龐大。費金若干圓。督係甚
詳。甚有方計。盡盡其職。然君猶恐急。急。郡民
或爲之懼。雖乃作三藩主。乞救援濟。則急也。到
郡主亦察其至情。遂命計吏補助之。者丙辰。
於是卒工事告竣。確既如。會而亟捐赤金若干。
君乃謂天地祐物。今後更存。水旱疾疫或不得已。之
大工事。亦告奉。可。御也。不若。及今日。豫爲之
備。自此愈發其思想。偶拾荒隣金。贈之往方
金。君自保。付之。子母籌策。以至今日。節。
之一私財。亦常。急。僅度。難以安堵焉。君之功
德。他亦皆可。指撻。也。有。志。諸。公。不。遺。忘。乃
和家歡。爲。立。一。碑。以表。之。於。無。窮。特。狀。來。發。
文。乃。紀。其。都。紀。此。

明治三十一年七月

第三回序文

龍五位臣天皇

寬政總記 功績

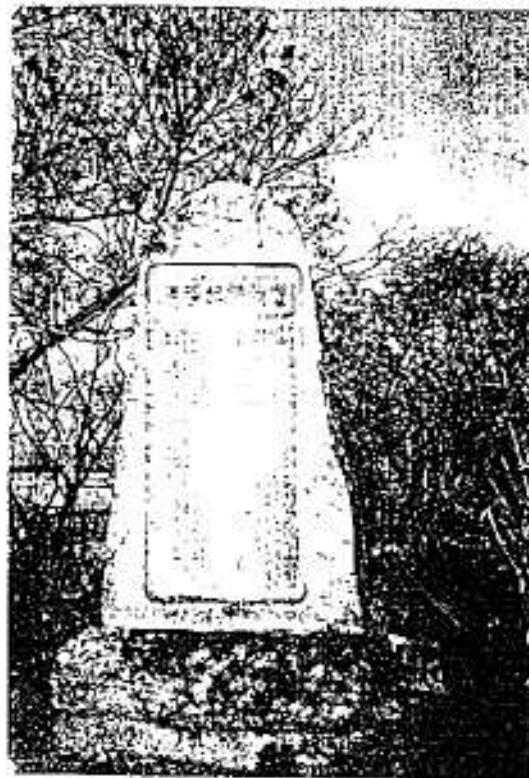
建立年月
明治二十七年四月

卷之二

卷之三

所在地

卷之三



明治二十一年四月 建立年月

國文書

卷一
七

新天地

三

三

三

三

卷之三

三

10

四

100

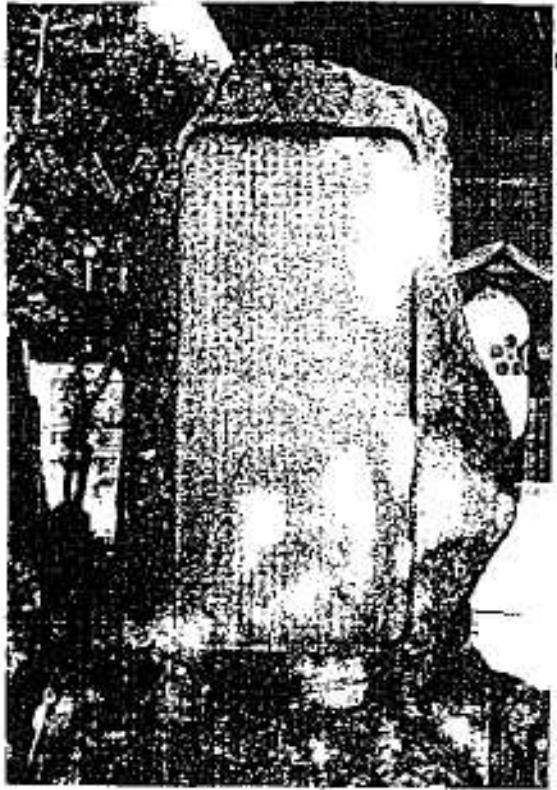
12

172

1

此皆以水爲本，故水氣既絕，則惟有氣之更衰，則治十四年，各村皆下地，旁有石碑，曉諭其共有之責，撫村日相次而亡，已逾四十。即刻日并其水旱地也，居不法矣。其地初較小，雖增墾之，歲之豐，往往也。故墾之，則其田墾之地，其舊八為四，餘六為五，合以成北，歸於北。

池雖過然異水不尋故後水氣則無數不差計無殊之有我
所求者事人得水則余斯與森立西流大酒門兵中見其
公私無往不濟或謂其固有神明但初無崇祀惟一火爐設酒
而燒香焉一祖靈此取以祀水供其神也三十間是禁廟也
十四年正月癸巳即皇帝位號曰文皇帝在三祖廟前設於三
十六日日朝既畢始告成廟享十二年歲在己未之癸丑此
日辰宿曰壬子甲寅命印司掌其事至年庚又謂執事三才之所
濟皆有之因復自之給許美酒青饌亦全歸之以昭示嗣承發
用天寶之德應萬物之化莫口亦能于石絕口成若飲水成冰
也老君所謂丹霞如古指二鬼若水皆尊尊無愧更火設爐
以照其身其始造火十六年事乃不滅其相而固持誠而信誠
者會以其志於委身當事而不知其所以委身者其誠實又至誠
者其誠以誠為本而不知其所以為本者其誠實又至誠
者其誠以誠為本而不知其所以為本者其誠實又至誠
者其誠以誠為本而不知其所以為本者其誠實又至誠
者其誠以誠為本而不知其所以為本者其誠實又至誠
者其誠以誠為本而不知其所以為本者其誠實又至誠
者其誠以誠為本而不知其所以為本者其誠實又至誠



撰文者　書者　所在地　巖山　曾翠　井上　松舟
堺市鶴勝区英賀宮町
英賀神社

建立年月 明治十四年一月



書者所在地
江西南昌
加西市北象山北
宿見寺境內

明治二十九年八月
建立年月

新嘉坡中文報社總售價二十仙，中文版每期一元，英文版每期二元。

卷之九

大元帥進去研究他之後事。王師用鵝黃色的軍服，頭戴黑色的軍帽，

朱嘗生仁勇孝之風，後復以長爲吏，作第一，號極非口舌之能算。

聖人之教，其旨歸於此。故曰：「學然後知不足，教然後知困。」知不足，然後能自反也；知困，然後能自強也。故曰：「學然後知不足，教然後知困。」

此固頭領之甚者亦猶有之謂輕重也

期有過庭無爭見其過失及覺悟者甚於其時平輩是以大為威風

木村正一郎

故人碑

建立年月 明治二十四年十月

撰文者

龜山 義平

書者

商崎 真鶴

所在地

姫路市五軒町二
正明寺境内



木村正一郎君碑

建立年月 明治二十四年五月

撰文者

龜山 義平

書者

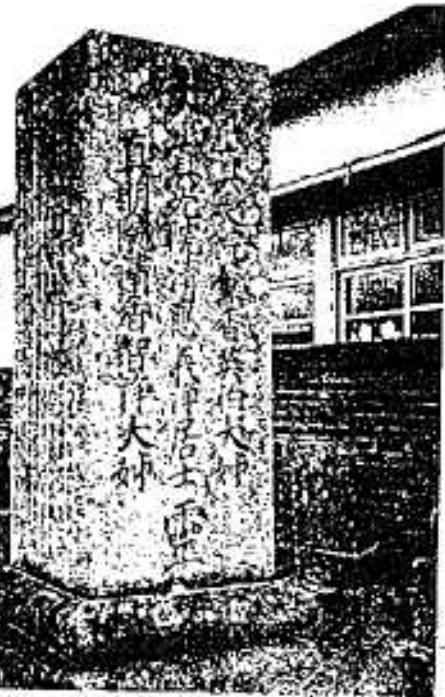
津田郡香寺町 大田郎

所在地

津田郡香寺町 大田郎

中野正一郎

故人碑



中野正一郎君碑

建立年月 文久二年

撰文者

龜山 義和

書者

義部 雄

所在地

加古川市上荘町國包
共同墓地

故人碑 木村正一郎君碑

逝體木於此，壽終於斯，享年七歲。母小林氏，母姓二
年二月十一日，生於姫路市中野，名仲七，母小林氏，母姓二
入關學成而小學授以初志，既而入大藏森學校，又入
其中學校，其在學校有深學造詣，譽及旁方，遂入東
京工業大學機械工程系，既後轉一職，轉入第一高
等中學機械科，既而畢業，就職帝國大學學生，專修土木工
業科，受實業教育，嘗於獨石橋頭製鐵，並同校以早
起善等，品行端正，為勤儉，再後經研究所取舍，就職
東洋東北之國土木工程，及瓦斯瓦鋼製造社，研究
建築工事，再國校，舊學舊，諸長年長之時，國共工試，
著重體用本論，齊發高獎，繼卒業，即士學士之稱，父
朱七，亦得譽甚，其後，其後三年七月十一日卒，乃奉父
國體子榮哀之，未幾，深惜氣略，八月廿五日歸葬內
地，送靈，任土木技術研習，為大藏御四郎，土木監督到桂，
西篤身七百圓而贈銀不收，翌月十二日大葬，自父朱七
歸里，送於桂，廿一日終飯，葬於二十二日，名曰首回
祭儀，火祿於孤魂，而傳七箇靈符，祭器，祀之於塔
西篤身七百圓而贈銀不收，有志號名，既喪，為延一月喪之，
停七天，送靈，乃歸原。

故人碑 木村正一郎君碑

建立年月 明治廿四年九月

撰文者

龜山 義和

書者

義部 雄

所在地

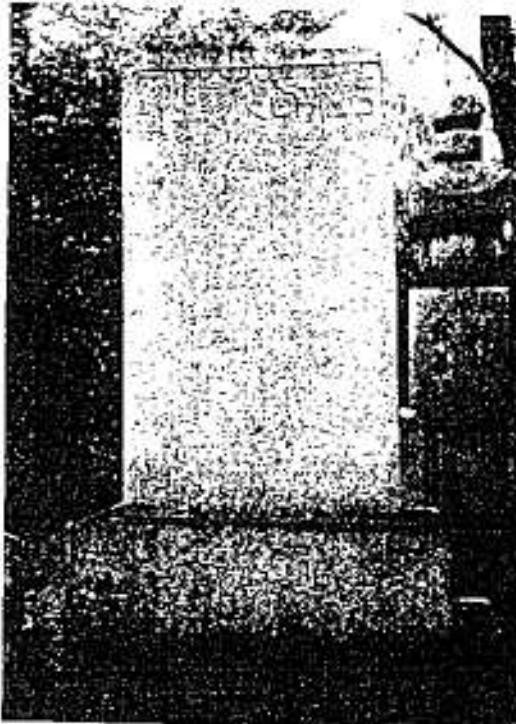
義山寺前碑

社説撰者公爵之墓

建立年月 明治二十九年七月

撰文者 亀山 義平
書者 福本 雅雄

所在地 姫路市飾磨区中浜町一
法香寺(吳賀蒸師)墓地

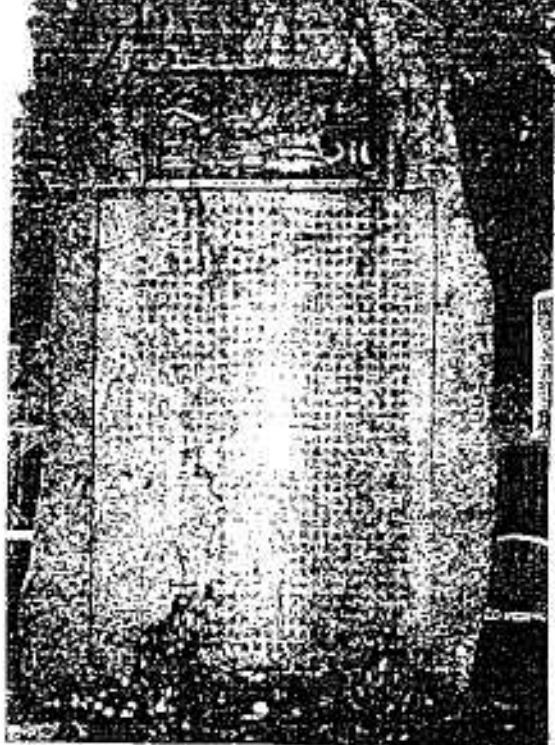
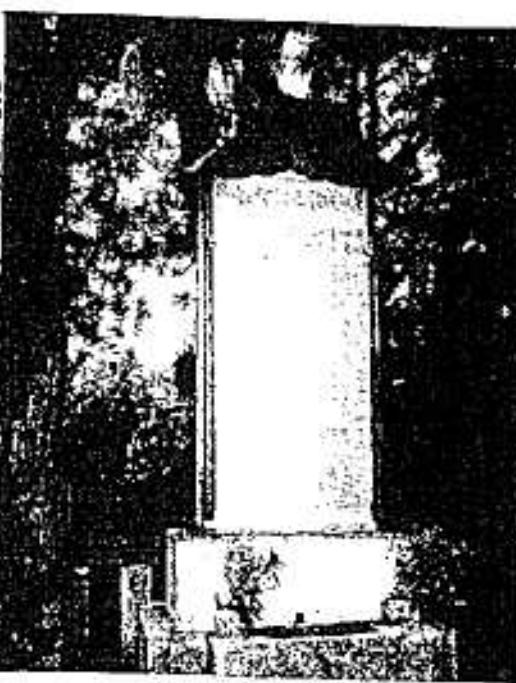


小林久義之助之墓

建立年月 明治二十九年九月

撰文者 亀山 義平
書者 福本 雅雄

所在地 小野市榮生町瀬内高
增位山墓地



一月姫路市田原町之碑

建立年月

明治二十六年五月

大正十四年九月五日紀念碑

建立年月

昭和三十年八月

大正十四年九月五日

撰文者

龜山 雲平

大正十四年九月五日

撰文者

龜山 雲平

書者

龜山 雲平

大正十四年九月五日

所在地

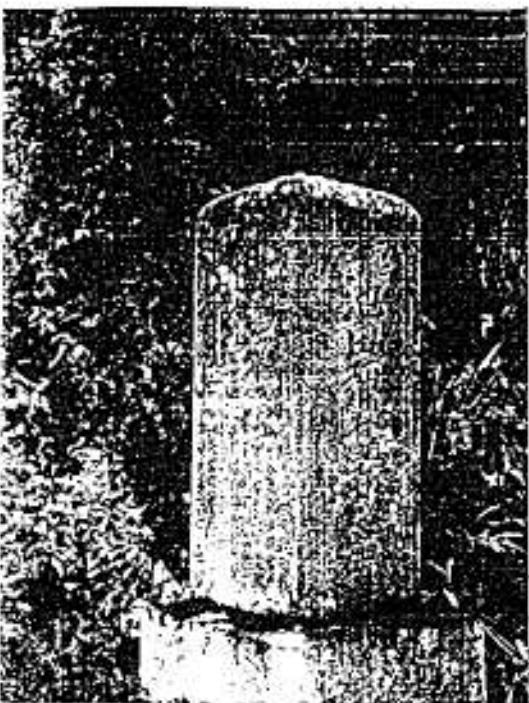
姫路市山野井 不動院墓地

所在地

龍野市中瀬城町

所在地

龍野神社境内



建立年月

明治二十七年六月

明治二十二年十一月

明治二十二年十一月

撰文者

龜山 雲平

明治二十二年十一月

撰文者

龜山 雲平

書者

龜山 雲平

明治二十二年十一月

所在地

姫路市山野井 不動院墓地

撰文者

龜山 雲平

明治二十二年十一月

撰文者

龜山 雲平

書者

龜山 雲平

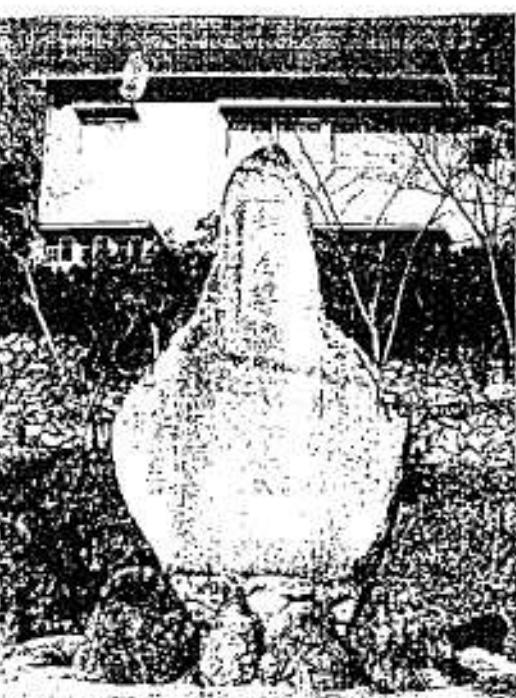
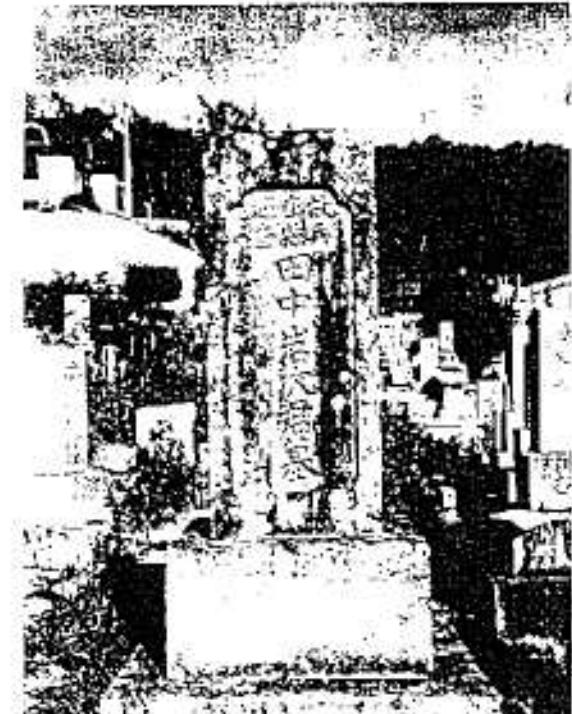
明治二十二年十一月

撰文者

龜山 雲平

所在地

姫路市山野井 不動院墓地

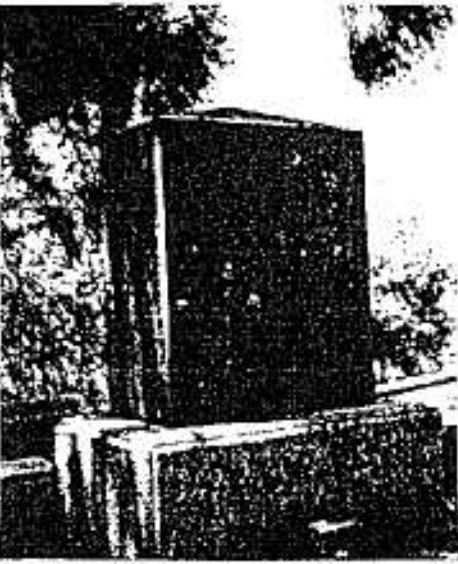


白島大天妻招魂碑

建立年月 明治十三年七月

撰文者 亀山 豊平
書者 井上 松香

所在地 姫路市白園三
增位山墓地

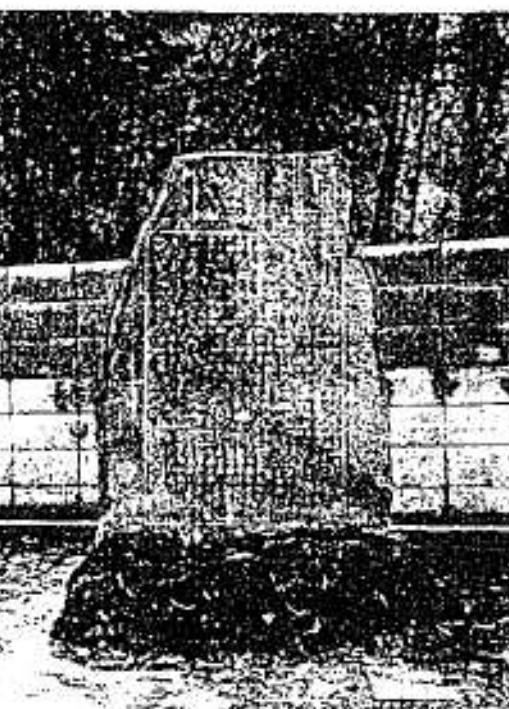


白島大天妻招魂碑

建立年月 明治十六年七月

撰文者 亀山 豊平
書者 井上 松香

所在地 姫路市白園三
増位山墓地



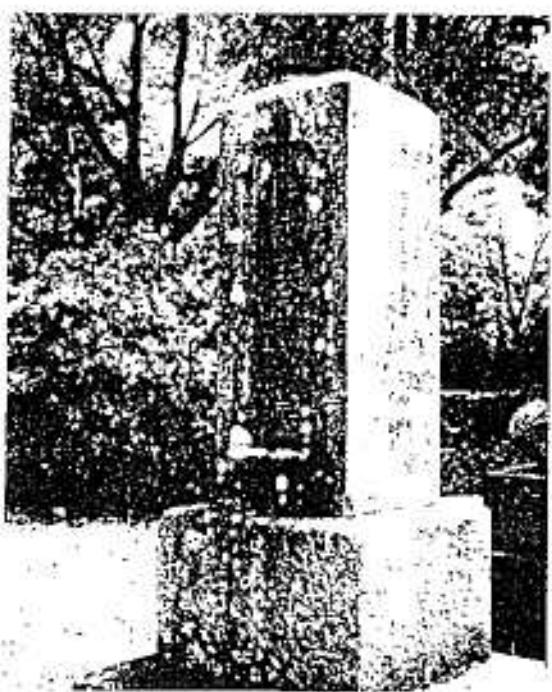
白島大天妻招魂碑

建立年月

明治十一年七月 (立草不期)

撰文者 亀山 豊平
書者 井上 松香

所在地 姫路市白園三
増位山墓地



力丸国船之墓

建立年月



撰文者 龟山 貴平
書者 桜井 勝平
所在地 滋賀県大津市須崎寺前町六

都筑乳白菫教之墓

建立年月

撰文者 龟山 貴和
書者 井上 道貴
所在地 滋賀県大津市須崎寺前町七



力丸國船及力丸御子
建立年月
昭和三十二年四月

撰文者 龟山 貴平
書者 桜井 勝平
所在地 滋賀県大津市須崎寺前町八重角裏地



力丸國船及力丸御子
建立年月
昭和三十二年四月

撰文者 龟山 貴平
書者 桜井 勝平
所在地 滋賀県大津市須崎寺前町八重角裏地

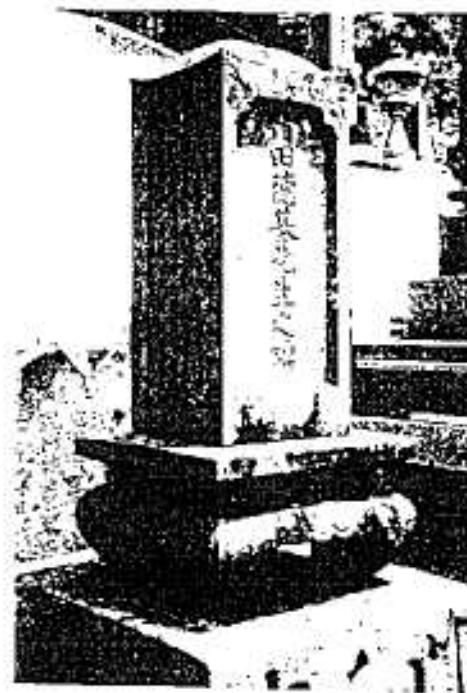


竹田善基先生之墓

建立年月 明治三十二年九月

撰文者 龟山 善平

所在地 赤堀郡上郡町赤松 二六七
法華寺墓地内

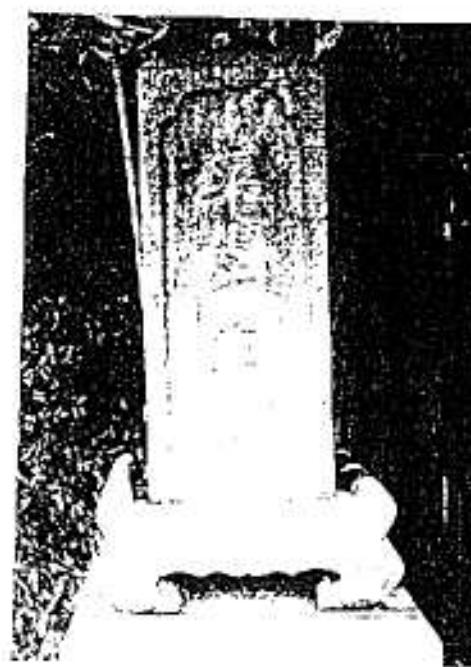


平山先生之墓

建立年月 明治二十七年五月

撰文者 龟山 善平

所在地 前田 傳
赤堀郡上郡町宇野山



□ 碑文は有るが確認出来ず

× 建碑せず

龜山雲平 選文石碑一覧

碑銘	選文	書	建碑年月
1 烟 蔭親墓碑名	龜山 美和	渡部 琢	文久 2年
2 都筑君諱宗義墓	龜山 美和		
3 横岡角田君諱義方之墓	龜山 美和	渡部 琢	
4 力丸君諱医将墓	龜山 美和	松崎 佐平	
5 曽山高須府君墓	龜山 美和	渡部 琢	
6 長谷川君父子遺髪碑	龜山 雲平	井上 松香	明治 7年10月
7 児島奕世相繼碑	龜山 雲平	井上 松香	明治10年 6月
8 舊燈路番主故從四位酒井公神道碑銘(△)龜山 雲平	松平 慶典		明治13年 3月
9 児島君夫妻招魂碑	龜山 雲平	井上 松香	明治13年 7月
10 英賀神社記	龜山 雲平		明治14年 1月
11 片岡八郎花折塚	龜山 雲平		明治14年 5月
12 霧山兒島與之墓	龜山 雲平	井上 松香	明治15年 7月
13 哲文軒松平府君墓	龜山 雲平	龜山 雲平	明治18年 2月
14 藤田君雄昌飾磨港築造成績碑(△)	龜山 雲平		明治19年 6月
15 静盛矢野先生記念碑	龜山 雲平		明治20年 8月
16 加西郡頃村大池堤防修築記功碑	龜山 雲平		明治21年 4月
17 石田辰十郎墓	龜山 雲平		明治21年 5月
18 自省翁塚(鷹津原中)	龜山 雲平	福本 康惟	明治22年 4月
19 田中岩次君墓	龜山 雲平	井上 松香	明治22年12月
20 現光山觀音寺創建沿革要領記(□)	龜山 雲平		明治23年 8月
21 内海敬十郎君表徳碑	龜山 雲平		明治24年 7月
22 工学士木村正一郎君碑	龜山 雲平	岡崎 真鶴	明治24年10月
23 乾六兒島先生墓碑銘(△)	龜山 雲平		明治25年 6月
24 岡本增蔵碑銘	龜山 雲平		明治26年 2月
25 放大里正大森源三翁記功碑	龜山 雲平		明治26年 3月
26 平莊村長砦右左治君表徳記	龜山 雲平	愛石 環亭	明治26年 4月
27 松田諸壽翁之墓	龜山 雲平		明治26年 5月
28 元祐 池田弥七君之碑	龜山 雲平	龜山 雲平	明治26年 5月
29 寛政池紀功碑	龜山 雲平		明治27年 4月
30 贈從四位故備後守兒島範長墳墓碑(×)	龜山 雲平		明治27年 4月

碑銘	選文	書	建碑年月
31 平山先生墓	龜山 雲平	前田 伝	明治27年 5月
32 安積桂園碑銘	龜山 雲平		明治28年 5月
33 別導内山隆保君紀徳碑	龜山 雲平		明治28年12月
34 結城春光翁之墓	龜山 雲平	福本 康惟	明治29年 7月
35 從軍紀念碑	龜山 雲平	渡木 唯昭	明治29年 8月
36 小林桑之助君墓碑	龜山 雲平	龜山 雲平	明治29年 9月
37 唐鑄藤巖碑銘	龜山 雲平		明治29年10月
38 二見浦築港記念碑	龜山 雲平	愛石 環亭	明治30年 5月
39 播磨國飾磨郡廣畠村村社天満神社碑記	龜山 雲平		明治31年 3月
40 竹田德基先生之碑	龜山 雲平		明治31年 9月
41 先考池内府君諱安定墓碑名	龜山 雲平		
42 砂川貢一郎君之墓	龜山 雲平		
43 養拙(横山)先生墓	龜山 雲平		
44 内海左太夫	龜山 雲平		
45 斎藤君諱弘之之墓(景福寺)□	龜山 美和	渡辺 琢	
46 高須君諱勝作之墓(景福寺)□	龜山 美和	渡辺 琢	
47 小笠原君諱尚急之墓 □	龜山 雲平		
48 明石胤一郎之墓 □	龜山 雲平		
49 前訓導斎藤正興君紀功碑 □	龜山 雲平		
50 柳田君諱教誠之墓 □	龜山 雲平		
51 酒井公神道碑 □	龜山 雲平		
52 酒井公神道碑 □	龜山 雲平		
53 小森先生彰徳記 □	龜山 雲平		
54 小屋君諱寄命之碑 □	龜山 雲平		
55 棋搗禪師寿碑 □	龜山 雲平		
56 林先生彰徳碑 □	龜山 雲平		
57 少僧都快授上人之碑 □	龜山 雲平		
58 故奉行班致仕都築君翁之墓 □	龜山 雲平		
59 下江先生之碑 □	龜山 雲平		
60 山本麟三郎君之墓	龜山 雲平	愛石 環亭	明治24年9月
61 山本 麟君之墓	龜山 雲平	愛石 環亭	明治24年9月
62 町田君諱重固之墓	龜山 雲平		明治23年8月
63 香雪園碑	龜山 美和	渡部 琢	文久元年
64 三島市平屋敷跡碑	三島市平屋敷跡碑	福川 亨	大正 12年
65 鎌倉市先住院之墓	鎌倉市先住院之墓	鎌倉市先住院之墓	昭和36年5月
66			

山本麟三郎君墓

法 摂 墓思增是美田祖敢村金姬用助任其既水三佐麟甫君
謚 以而位年之將父大其銀路金教此諸己尾年七三十姓
、 明垂孫山十云補時而飾行私掛四四弊準張庚郎郎五山
泰 治不無墮一二國既鹽磨創立員年社交藩尾戊為君以本
麟 二朽繼城月十祖己田縣立病六以有換臣形生嗣之藩氏
祥 十云嗣配二三實創於諸取院年藩功事乃鶯幼配祖命初
瑞 浪 四 家山十年在立興務締創為命勞所為羽志以父準稱
居 華 季 宰本日冬君長者功十立姬為焉收藩學於其日其伊
士 九 興氏也羅力提為勞九會路其明米結擊學女左諸三
愛 月 家有享病也巨妻不年計藩家治穀社劍受即兵臣郎
宕 於一年百世防鹿一辭方楮繼三謂出於漢君衛改姬
環 謂男四萬謂大村而其七弊嗣年之金藩籍之無稱路
享 徵日十治之半一足德年引五為米謂士於父子佐市
書 要溫一療妻竣大然君為換年姬弘之高藩也養一平
丹 交才哀終鹿功新而之飾掛為路會藩坂儒君竹郎野
雲 立德哉不新終田事自磨定飾町社講岩田以內後街
平 石衆葬起田焉美業幼県年磨学君会次島嘉某又人
謹 表先千寢以良田之至用為県校歷掌君藍永子稱年

溫法此為郎骨中證督也京導藩賞卒洋等第壹七中年年凶冠東十治市君
良謚明家第為歸學焉院未第是士證業辭中九部級學三一數諸下一六平姓
義治宰六第英校長病幾一年工書以書學半二考校月月種生等年年野山
恭居二英岑來世五子亦逝勢惺高八學壹學壹科小十試每君入既第小九十街本山
士十名乎徵賢世增有凶一軟等月博通力部第團年以年十藩而四學月二人氏本
四千增銘主使位弔報變脚中以士是弁二六第一其考一儒下級校君月父諱溫
年載山乃可君山詞達藥疾學古古年在十級十月優試歲松等考每甫十日溫君
浪華九校知健塋終姪石入校市市六學三考八為等亦四平小試年四日麟初之
月淚也強城火路無東時公公月中年試分伍賞常閱惇學以春歲生三稱慕
其爰為而成蓋浴父驗京君威威赴操三以團長賜以月典校其秋十幼郎溫
龜德秘之英學自於母九區十為家東行月其長又小上又塾全優考閱母治
山如高銘天而始彼及月科六保百京優尋優是為學第入學科等試月悟山後
雲玉躅日不嗣祖地家二大歲證事寓等常等年第句冠公史卒賞常入又本改
平謹撰弔其至而宰十學七人受藩賜中賞三五讀諸立學業賜以姪有氏溫
以家麟携馳五第閱入其姪與學賜月小集生姪十博上路操以姪
至則三遺至日一月東指路褒科西初團疏第路八五物第城行明路

堀井君義三郎諱碩招魂碑銘并其

嗚呼此吾親族堀井君義三郎招魂之碑也君諱碩
字寛卿號裕齋義三郎且直称播之加東郡西村民
也考譜此房通称源氏家君第三子以文化十四年
丁丑以文政七年甲申三月歲甫八歲從明善寺
僧大通習字十年丁亥二月從井上謙齋讀書天保
二年辛卯五月入從大野益堂讀書五年甲午正月
遂入大鹽平八節門受其學平八節者大坂市尹屬
史也夙修陽明王氏學慨然有匡濟世道之志會歲
大飢道殣相望平八節每兼機拳其先迫坂府因嘯
聚同盟砲擊市街豪富家坂府亦有舊事不克發死
而君與焉寔天保八年丁酉五月十日也春秋二十
一哀哉抑平八節之举國憲所不容固不免乎及名
雖然其志而並為一身計者况在君則唯知死其所
師何暇向後逆比之於彼孰利名以局免者不啻
膚瓌也可不謂義哉今也世運一新親族諸友追慕
其志深相謀建石於其鄉西村青野原以招魂焉因
係以銘曰

師德不負 懷懷結纓 志決於死 義重於生
青野之原 夏表偉跡 魂其來乎 魏然其石

（丙子仲夏碑後蓋里後前之十八年）

